

TS化した俺は…。

0ひじり0

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

TS化した八幡が色々な人に攻められちゃう物語。

基本的に八幡が受けです。

また、百合&ふたなりですので苦手な方はお気をつけ下さい。

俺こと0ひじり0の欲望を詰め込んだだけの自己満足な物なので中傷などはしないで下さい。ハートがブレイクしちゃいますので。

目次

プロログ&設定

case Komachi Ep. 1

case Komachi Ep. 2

case Komachi Ep. 3

neutral Ep. 4

case Yukino Ep. 5

case Yukino Ep. 6

case Yukino Ep. 7

case Yukino Ep. 8

case Yukino Ep. 9

case Yukino Ep. 10

特別編 お前とのバレンタイン

case Yukino Ep. 11

特別編 魔王の心は飴模様

case Yukino Ep. 12

neutral Ep. 13

case Rumi Ep. 14

case Rumi Ep. 15

case Rumi Ep. 16

case Rumi Ep. 17

case Rumi Ep. 18

case Rumi Ep. 19

case Rumi Ep. 20

case Rumi Ep. 21

100 95 91 87 84 80 75 70 66 63 53 50 46 43 39 33 29 26 23 19 14 9 5 1

c a s e	K e i k a	E p.	2 4	138
c a s e	K e i k a	E p.	2 3	133
n e u t r a l	E p.	2 2		130
特別編	聖夜をあなたと共に			105

プロローグ&設定

オツス！おら八幡！

…はい。いきなり妙なテンションで挨拶してごめんなさい。
しかし、これには訳があるんだ。それは…。

八幡「……………」

無言でドレッサーの鏡を見る。そこに映るのは臀部まで届きそうな黒髪、顔は美少女まではいかずともなかなか顔立ちが整っているが目の濁りが台無ししている。更には由比ヶ浜程ではないが、かなり大きな胸にスラリとした腰。身長は一色より少し小さいくらいだろうか。そして頭の上から生えるアホ毛はゆらゆらと揺れている。

つまり、俺は女体化（TS化）してしまった。

そりや、あんな妙なテンションになりますよ。え？ならない？嘘だ
!!!ごめんなさい。

八幡「はあああああ?!?!」

いやいやいや。待て。落ち着け俺。

つか、声まで女だし…って当たり前か。

幸い小町は出掛けており、今は一人だ。

とりあえず俺は部屋に戻り、状況を確認する。

昨日は土曜日で学校は休みで家でごろごろしかしていない。あれ
?もう詰みじゃね?

小町「たっだいまー。」

俺が半ば考えるのを放棄していると小町が帰って来た。

小町「お兄ちゃん。まだ寝て…るの……………誰?」

八幡「よ、よう…。」

扉を開けた小町は俺の姿を見て固まってしまった。そりやそうだよね。

小町「ど、どちらから拐われて来たんですか?」

八幡「いやいや。拐って来たの確定なの?酷くない?」

俺ってそんなに信用ないのか…。よし。泣こう。

八幡「あー俺だぞ。小町の愛しのお兄ちゃんの八幡だぞ。」

小声でブツブツと呟く小町に声をかける。つて言うか聞こえてるからね?『新しいお義姉ちゃん候補?』とか『あのヘタレのゴミいちやんだからありえない。』とか『早く自首させないと』とか全部聞こえてるからね?ほんとうらたん。

小町「ほ、本当にお兄ちゃんなの?」

八幡「ああ。本当だよ。」

小町「うむむ…よく見るとこの目の濁り具合は確かに…。」
はい。わかってました。

そこでわかっちゃうんだよね。

小町「なんで女の子になってるの!?!」

八幡「さっぱりわからん。」(福○雅治風)

小町「ごめん。イラツとするからガリ○オの真似しないで。」

八幡「ごめんなさい。」(土下座)

小町「ん。わかればよろしい。」

とりあえず土下座をした俺の前に小町が座り、俺も頭をあげて座り直す。

小町「とりあえずどうするの?」

八幡「わからん。幸いにも今日は日曜日だから、様子見て明日になってもこのままなら病院に行く事にするわ。」

小町「そうだね。今日行っても病院事態は休みだからあんまり意味ないしね。」

八幡「そーいや親父達は?」

小町「遅くなるとは言ってたから多分23時位に帰って来るんじゃないかな?」

休日出勤の上に残業とかマジで社畜の鏡だな。やはり俺の進むべき道は専業主夫だな。あれ?今は主婦か。

八幡「とりあえず今はどうしようもないんだから少し寝るわ。」

小町「わかった。お昼ご飯が出来たらまた呼ぶね?」

八幡「ん。頼む。」

小町は手を振りながら部屋を出ていくのを見送りベットに横になる。

八幡「はあ：これからどうなるんだか。」

俺は寝返りをうった。しかし、異変が起こる。

八幡「んっ：。」

直に着たスエットの生地で乳首が擦れてしまい声が漏れてしまった。

八幡「：な、なんだよ。これ：。」

一度燻った劣情の灯は俺には刺激が強く、無意識に胸の頂に両手が伸びる。

八幡「ん、あ：あん：。」

ゆっくり指先で撫でるだけだった愛撫も次第に激しくなり、胸全体を鷲掴みするように揉む。気持ちいい。

背筋に弱い電流が流れている様で右手が自然と下に流れて行く。ダメ。これ以上したら戻れなくなる。

脳が警笛をならすが、それすらも上回る快感に逆らえない。

八幡「っ!?!?あああああ!!」

下に流れた手は目的地である局部に到達し、ゆっくり撫でるだけで大きな喘ぎ声をあげてしまう。

だが、指は止まってくれなかった。

女である体は更なる快感を求めて、男である精神は狂ってしまいそうになるほどの快感に恐怖が芽生える。

八幡「んくっ、あう、あっ、んんっ。」

言うことを聞かない手を何とか動かし、口を押さえるが陰部を愛撫する手は止まらない。

押さえた手の端から涎が頬を伝い、声が漏れる。

八幡「ん、っん、っ!?!んくうううう!!」

陰部を愛撫していた手は激しさを増して遂に最も敏感である肉芽を指で弾いてしまう。

スエットの上からのそれは荒い生地で更なる快感を脳髓に伝える。

スエットの袖を必死に噛み付き何とか大声を押さえるが初めての女の快感に意識を手放してしまった。

小町「はあ：はあ：。」

味わったことのない初めての快感に周囲に気を配る余裕はなかった。その為、扉の隙間から部屋を覗く自身の妹である小町に気付かなかった。

部屋の扉がゆっくりと音も無く開かれる。

小町は部屋に入ると充満した甘い匂いにくらくらし、更に息が荒くなる。それと同時に自らの陰部からクチュと愛液が溢れて太股に伝う感触に身震いをする。

小町「…はあ…はあ…お兄ちゃん…。」

ベッドの傍らに立って兄を見下ろす小町の瞳には強く激しい劣情の炎が灯っていた。

―続く。

比企谷 八幡

TS化時のプロフィール

身長：154cm

体重：41kg

B：87cm E

W：53cm

H：76cm

ある朝起きると女体化（TS化）していた悲しき主人公。

本人は認めないが、かなりのMでどんなプレイでも本人の意思とは別に快感を得てしまう。

性的興奮してしまおうと発情フェロモンが分泌されてしまい周りも発情してしまう。

更に彼女の愛液を飲むとふたなりになってしまう。

サイズは人それぞれ差がある。

後々追加するかもです。

Case Komachi Ep. 1

ちゅび、れろ、ちゅう。

意識が徐々に覚醒していく中、何かに吸い付く水音が耳に入ると同時に二丘から弱い快感が流れてくる。

「んあ、ああ…。」

「あ、起きたんだね。お兄ちゃん。」

俺が声を漏らしながら下を向くと、胸の頂を口に含み舐め上げる小町と目が合う。

ちゅぱつと口を離れた小町は笑顔で話しかけるが俺は気付いてしまふ…小町の瞳は妖艶な色が滲んでいる事に。

「あん！な、何をしてるのかな？小町ちゃん？…ひゃん!？」

「はむっ、何って、れろ、お兄ちゃんが、ちゅぱ、悪い、ちゆる、んだよ?。」

「やん、あつ、な…んんっ、なん、で、ああん、だよ…?。」

乳首を口に含み弄びながら答える小町に俺は喘ぐ声を止めれないが何とか返事をする。

「ぶはあ、だって…お兄ちゃんのいやらしいオナニー見てたら我慢できなくなっちゃった。」

「んんっ！見てた…のか?。」

荒く息をする俺に小町はブルツと身震いをして目を細める。

「だからね?…襲っちゃうの…お姉ちゃん♪」

俺に抱き付き耳元で囁く。

驚く俺とは別に体は更に熱く火照ってしまふ。

小町は俺に抱き付いたままその慎ましい胸の中心にある乳首を俺の乳首と擦り合わせる。

「あん…気持ちいいよお…。」

「んっ、あ…小町い…ダメえ…。」

「あはっ、お姉ちゃん。かわいい。んむっ。」

「はむっ、んんう…。」

小町の熱い舌が俺の唇をこじ開けて口内に入り込む。歯茎、内頬、

舌を縦横無尽に動き回り、蹂躪する。始めての口付けに目の前がパチパチと花火が飛び散り、思考を真っ白に塗り潰す。

ちゅ、ずる、ちゅぱ、はむっ、ちゅるる。

「ぷはあ…かわいいよお…。」

「あふ…や、やめてえ…。」

首、鎖骨、胸、乳首、腹と徐々に下に下がりがらキスの雨が降り注ぎ俺は一つ一つに喘ぎ声が出てしまう。遂に陰部に到達した小町は恥毛ないそこをゆっくりと開く。

「お姉ちゃん、凄く綺麗…。」

「あう…言うな…。」

恥ずかしさの余り腕で顔を隠す俺に微笑み舌伸ばしてゆっくりと陰部に近付く。

腕の隙間からその光景を見ていた俺は徐々に息が荒くなっていくのがわかった。

ペロツ、ぢゅるる、クチュ、れろ、ちゅうう。

「ひゃ…あああああああ…。」

プシヤアアアア。

「んむっ!?ぷはあ、あはっ♪お姉ちゃん綺麗だよ。」

陰部を舐められた俺は体が弓なりに反り、ものの数秒で2、3回達しながら余りの快感に放尿してしまう。陰部を舐めていた小町は俺の失禁を間近で浴びてしまうがその顔には嫌悪は無く、嬉しそうに笑みを浮かべるばかりだった。

「ん…小町なんか変だよ?お股があつい…。」

「小町!？」

いきなり苦しみ出す小町に俺は体を起こして小町を引き寄せる。そのまま小町をベッドに寝かすと小町は股の辺りを押さえながら俺を見つめる。俺は小町の手を優しく退かして出来る限り優しくそこを撫でる。

づりゅううう!

「ああああ!」

「…え?」

ぶりゅ、びゅるる、どひゅう。

撫でていたそこからいきなり男の象徴である肉棒が生える。そのまま大量の白濁が吐き出され、俺の手や体、顔に飛び散る。ペロツ。

口の近くにかかった白濁を舌で舐める。普通あるはずの嫌悪感は無く、美味しく感じてしまった。

「ん、ふうう…。」

「はあ、はあ。お姉ちゃん?」

白濁を舐めただけで軽く達してしまった。意識が朦朧としている中、俺が思った事は『もつと欲しい』だった。引き寄せられる様に平均より大きい肉棒に口付けをする。

チュツ。

「あつ、お、お姉ちゃん…。」

俺のいきなりの変化に戸惑う小町を見つめながら一気に肉棒を飲み込む。喉の奥まで入り込む肉棒は外から見ても分かる位に喉が膨らみ、呼吸が困難になる。苦しい。

「ごりゅごりゅ、ぐちゅ、ぐぶつ。」

「んふー…ふー…。」

「あああ…気持ちいいよ…。」

ずるる、ごちゅ、ずちゅ、ぐぼつ、ごりゅ。

奥まで入った肉棒を限界まで引き抜きまた飲み込む。苦しい。気持ちいい。もう訳がわからなくなる。

プシュ、パタパタ、プシャ。

奥まで飲み込む度に自分の陰部から愛液が吹き出しながら達しているのがわかる。

「でる…でるよ。イクうー!お姉ちゃん!!」

「ごちゅん!!」

「んぶう!!」

「ごびゅるるるー!ごぼぼつ!」

プシュ、プシャアア…。

小町は後頭部を掴み手加減無しに肉棒を喉の奥まで叩き込み白濁

を吐き出す。先程出したとは思えないほどの量の白濁が俺の喉に直接流し込まれ、それを飲み干していく。その火傷しそうな程熱い白濁を飲み込む度に俺は達している。

ずるるる、ちゅぽ。

「んくつ、ケホツケホツ。」

「…お姉ちゃん。」

肉棒を引き抜かれて口内に残った白濁を飲み込みむせた俺に立ち上がった小町は声をかける。

小町の方を向くと少しも萎えていない肉棒が目の前にある。そこから発せられる匂いにくらくらしながらも上目遣いで小町を見ると妖艶に笑う小町が俺の頭を掴む。

「口の中…犯すね。」

「……………」

コクンと頷く俺に小町は嬉しそうに身震いをして俺の唇をに肉棒を押し当てる。

ああ。これからオナホルの様に口内を犯されると頭も体も理解すると俺の体はこれ以上ない程に火照る。犯してくれ…早く…。

―続く。

Case Komachi Ep. 2

「フー…フー…。」

「あはっ♪お姉ちゃん待てだよ?」

小町の局部から本来あるはずの無い肉棒の先端部分をくわえてそのまま制止されている。

俺は少しでも肉欲を満たすため鈴口から漏れ出たカウパーを舌で味わう。美味しい…けど満たされない。逆に昂りは高まるばかりだ。

もうこの状態でどれくらいの時間がたったかわからない。数秒? 数分?

もう時間の感覚も狂っているのかわからない。

ピチャ。

肉棒から発せられる匂いと味でクラクラしてきた俺は体の前に手を付くとそこには小さな水溜まりが出来ていた。

「あーあ、お姉ちゃんたらそんなに小町のチンポが欲しいの?…涎をそんなに垂らして。」

…え?

自分の頬を触ると口の端しから涎が次々流れている。

小町を見上げると蔑む様な目で俺を見下していた。

「んっ、ふうう…。」

その目を見た瞬間にゾクゾクと身体が震える。

ごりゆうう!

「んぶっ!!」

小町はこの瞬間を待っていたかのように肉棒を振じ込む。肉棒は俺の舌を押し退け、喉を無理矢理に抉じ開けて奥まで犯される。

しよわああああ

いきなりの快感に俺の脳が焼き切れてしまいそうになり、目の前が真っ白になる。

全身の力が抜けて大量に失禁をしてしまいそして自分の身体を支えていた手も糸の切れた人形の様になり、俺の体を支えるのは犯す為に頭を掴んでいる小町の手だけだ。

「お姉ちゃんの喉マンコ温かくてキュッて締め付けてきて気持ちいいよー。」

「ぐちゅ、ぐぷつ、ちゅぼ、ごりゅ、ぐりゅ。」

容赦なくオナホルルの様に喉を抉られる。呼吸が出来ない。胃液が食道を逆流するが硬く反り返った肉棒が塞ぎ止めてそのまま押し返す。

「あ、出るよお姉ちゃん！奥に出すよ!!」

「がちゅ！ごり！ごりゅ！ぐぼつ！ぐぷつ！どちゅ！ばちゅん！」

容赦など微塵もない荒々しい輸送に一突き毎にイキながらも必死に肉棒に舌を絡める。出してくれ。濃いのを溺れる位に。

「ぐちゅうう!!」

「ぶびゅ、びゅるうう、びゅううう。」

一度大きく腰を引いてから叩き付けるように押し込まれた肉棒が大量の白濁を吐き出す。

「飲み込むなど優しいものではない…食道に直接流し込まれる。」

「んぐつ!!…んぐ…んぐつ。」

「う、くううう…ああああああ!!」

「びゅる、びゅ、びゅ、ぶびゅ。」

何度か小刻みに輸送してやっと長い射精が終わりを告げる。

「ずりゅ、ずるるる…ちゅぼ。」

「はあ、はあ、お姉ちゃん。見せて。」

「ん、れー。」

ゆつくりと名残惜しむ様に引き抜かれた肉棒に残った白濁を搾り取るように吸い付いて俺の口から離れ、口内に残った白濁を小町に見えるように口を開けて舌を出す。

「よく味わって飲んでね?」

「くちゅ、ぐちゅ…ぐくん。」

「んっ…美味しい。ご馳走さま。」

ゼリーみたいにぷりぷりの白濁を口内に満遍なく染み込ませる様に租借して少し喉に引っ掛かるが飲み込む。

言葉を喋ると自分の口からその生臭い白濁の匂いが立ち上がる。

「っ…／＼…お姉ちゃん！」

「わっ!？」

ちゅっ、ちゅぱ、れろ。

小町は俺に覆い被さる様に抱き付いて強引に口付けをされる。

「はあ。お姉ちゃん…もう、いいよね?。」

「んはあ。い、いいって?。」

なんて白々しいのだろう、頭は理解して身体はそれを欲して止まないのに兄妹…いや、今は姉妹か…その血が繋がった家族で一線を越えるのを理性の化物と称されたそれが止めようとする。

「わかるでしょ?こんなにもマンコをトロトロになってるのに。」

「あん、そりや…んっ、わかるけど。ダメだ。」

「嘘…本当は入れて欲しいんだよね?。」

「そんな事…ない。」

「ふーん。」

抱き付いていた身体を離して俺の太股を両手で大きく開き肉棒で陰部を擦る小町はつまらなそうに返事をする。

俺の身体は早くその振り返った肉棒が欲しいのか愛液が溢れてくる。

「おねだりさせたかったけどもぅいいや。入れるね?。」

「ま、待て小町。」

「無理。」

くち、ぐぬぬう…。

「お姉ちゃん。処女膜破るね。」

「…あ…かはっ…。」

少し入っただけで返事が出来ない程の快感に少し怖くなり、首を横に振るが小町は止まらない。

じゅぷ、ぷちっ。

「あ、ああん!!」

「破けちゃったね…動くから。」

ぱちゅ、ぱんっ、ぐちゅ、ぱちゅ。

「あ、あん、んっ、あっ、だ、だめえ…こ、わ…れる。」

「お姉ちゃんの中気持ちいいよ！こんなの、直ぐに…出ちやうう。」
ずりゆ、びゆ、びゆる、びゆうう。

「あ？！そんな…んんっ！」

「…ふふっ♪」

小町はイク寸前に肉棒の先端だけ入ってる状態まで引き抜いてから射精する。なんで？子宮に出されずキyunとうずく。

膣を白濁でみたされゆっくりと塗り込むようにピストンする小町は凄く妖艶な笑みで俺を見つめるまるで俺の子宮が疼いているのが分かっていくかのよう。

ぐちゆ、ぱちゆ、ずちゆ、ずるうう。

「もういっぱい出したしそろそろお終いにしよっか？」

「っ!？」

小町の言葉に俺は必死に手を伸ばして引き留めようとする。その姿を見て小町は意地悪く笑う。

「ん？お姉ちゃんどうしたの？」

「え、いや…その。」

口ごもってしまう俺に小町は何かを思い付いたようにニヤリと笑う。

「今はお姉ちゃんなんだからちゃんと女の子らしい言葉でいやらしくおねだりしよっか。」

「…む、無理だ。」

「じゃあ、止めちやうね？」

「うぐっ…わ、わかった！言うから！」

小町は心底嬉しそうに笑いながら俺の言葉を待つが急かすようにちゅぽちゅぽと先端だけ出し入れする。ただそれだけなのに俺の身体はピクリと過剰に反応してしまう。

「ほらほら、早くしないとまたこのまま出しちやうよ？それで止めちやうよ？」

「んっ、はっ、あん。ちょ…動かれ、たら…言えない…だろ…？」

「ダメ。後、10秒で言わないと止めちやうからね。」

「なっ、そんなあ…。」

小町の言葉に焦る俺は必死に言葉を紡ぎ出す。

「わ、わたしの…濡れ濡れのいやらしいオマンコに…小町のた…逞しい、お、お、オチンポを入れて子宮に、沢山ザーメンを出して…下さ
い。小町のなら出来ても…孕んでも…いいからあ…。」

—続く。

Case Komachi Ep. 3

「わ、わたしの…濡れ濡れのいやらしいオマンコに…小町のた…逞しい、お、お、オチンポを入れて子宮に、沢山ザーメンを出して…下さい。小町のなら出来ても…孕んでも…いいからあ…。」

小町が身体を起ここしていて伸ばしてる手は届かないがそれでも必死にすがり付く様に手を伸ばし続ける。

小町はおねだりに気を良くしたのか嬉しそうに微笑み指を絡める様に俺の手を握る。所謂恋人繋ぎだ。

「あ、ふう…かわいいよ。今の聞いただけで出ちやいそう。」

「小町…小町い。」

「はいはい。お姉ちゃん今あげるから、ね！」

ばちゅん！

俺を押し倒す様に繋いだ両手をベッドに押し付けるながら一気に奥まで貫く。

下りて来ていた子宮が逞しい肉棒で叩き上げられる。

「あ…っ…っ…っ…!!?？」

一瞬遅れてバチツと脳に電気が走り声にならない鳴き声が出る。

ばちゅ！ばちゅ！ぐちゅ！じゅぶ！ごり！

小町は手加減などしなかった。

躊躇いなく肉棒を引き抜かれた乱暴に奥まで貫く。テクニックなど微塵もないまぐわい。それは雄が牝を孕ます為だけの獣の交尾。

「あぐっ、かはっ、ん、ああー！」

「はっ、はっ、はっ。」

ごりゅ！じゅちゅ！ばちゅん！ずちゅ！

二人の間に会話などなく俺はただ喘ぎ、小町は俺を貫く。

子宮は受精しようと下りて肉棒を迎えに行き先端に吸い付く様にキスをする。

そして俺を孕まさんとする肉棒は少しでも可能性を上げようとして子宮口を押し広げようと暴れる。

ごりゅりゅ！ざりゅ！くぽっ！ばちゅ！ずちゅ！

「ひぐつ!? ああーんあ、やああ…そ、れ…だめえ…」

足を俺の広げられた太股の滑り込ませ手を繋いだまま上半身を起こすと膨れ上がった亀頭の力りで膣の上部分…Gスポットを抉られ小さく悲鳴を上げてしまう。それでも尚止まらないお構い無しに突き上げられ膣から膀胱を圧させる。

抗議の声は届かず腕を引っ張られて俺の上半身は軽く浮いた様な不安定な状態も合間ってフワフワとしてしまう。

「や、これ…おしっこ、出ちゃう、からああ!」

プシュ、プシヤアア!

俺が言い終わる前に無色透明な液が陰部から吹き出る。それは匂いもない。

俺は初めての性行で潮を吹いてしまった。

「はっ、はっ…出る。イクよ? お姉ちゃんの子宮をいっぱいにするからー!」

「ん、あ、きて…きてえ…小町のドロドロのザーメンでいっぱいにしてえ!!」

ばちゅばちゅぐちゅじゅぶじゅぶぐぶつずちゅ!!

小町は俺を引っ張り逃れられない様に腕ごと抱き締めて射精体勢に入る。

女になつて体格差も殆ど無くなった俺はなす術も無く、されるがままを受け止める。

動物としての本能か雄が射精するとわかった子宮は精液を飲み干そうと肉棒の先端に吸い付き離さず、子宮口は精液を残さず飲み干そうと口を開く。

「ああー出る出る出る! お姉ちゃあん!!」

「小町ー小町いー出してー! いっぱい出してえ!!」

くぼっぐぶつどちゅばちゅん!

びゅうううー! びゅうううー! びゆるうー! ぶっ! びゆるー!

「あっ、あっ、ぐうう…」

「やああーすっ、いっぱい出てる…あ、んっ、や。」

限界まで奥まで突き刺さった肉棒から大量の精液が吐き出される。

直ぐに子宮の中は精液で満たされるがそれでも射精は止まらず子宮も一滴も溢さない様に飲み干す。

びゅる、びゅ…とぷ。

「あ、はあ…んっ。」

「……ん…はあああああ!!」

小町の火傷しそうな程に熱い精液は俺の子宮を犯す。

その感覚に悶え、達してしまった。

「ん♪お姉ちゃん中出しでイッちやったね。」

「はあ、はあ…小町い…キス、キスしてえ…。」

「いいよ。んっ…。」

「はむっ…ん。」

ちゅる、ちゅぽ…れる、れる、ちゅ…。

深く繋がったままお互いを労る様に口付けを交わす。小町が押し入れば受け入れ。俺が押し入れば受け入れてくれる。相手を思いやる幸せな口付け。

「ん、ぷはあ…お姉ちゃん。このままもう一回いい?」

「んはあ…ん、いいよ…いっぱいして?」

ずりゅ…ずちゅ、ぱちゅ。

小町は両手で俺の顔に掛かる前髪を頭を撫でるように上げて俺を見つめ、俺は慈しむ様に小町の頬に両手を添えて見つめる。

ぱちゅ、じゅぷ、ぱん、ぱちゅ。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。」

「あ、あ…んっ、小町、そこ…気持ちいい、よ…。」

徐々に激しくなりつつある性行。しかし、俺達は決して見つめる目を離さない。

先程のが獣の交尾なら今は恋人の営みだ。それはお互いの身も心も満たされる行為。

滴る小町の汗。

密着した肌。

そこから感じる体温。

そして火傷しそうな程に熱い肉棒。

それら全てが心地いい。
ぱちゅぱちゅぱんっずちゅ。

「あ…お姉ちゃん。小町イクよっ。」

「あは、ん…いいよ…いいっぱい出してね？」

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぐちゅじゅぐちゅ！

「うん、うん…出す。いっぱいお姉ちゃんの中に出すよ！」

「小町、小町！出して！お姉ちゃんにっぱい小町を感じさせて！」

ぱんっぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぐちゅじゅぐちゅ！

段々お互いに限界が近くなり、小町は腰を激しく打ち付け、俺は必死に肉棒を締め上げ…限界を迎えた。

ぱちゅぐちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぐちゅじゅぐちゅぱちゅん！

「あ、あ…んあ。出る…イク、出る出るう…っああああ！！」

ぴゅ、ぱちゅ、びゆる、じゅちゅぱちゅ、びゅううう、ぱちゅぱちゅぐちゅ、びゅうううう、ぱちゅぱちゅぐちゅ。

「や…ああああああ！！小町!?出しながら突いちやだめえええ！！」

ぱちゅぱちゅぐちゅ、びゆるう、ずるるるるぱちゅん、びゅううう、びゆる、ずちゅずちゅ、びゆる、ぱちゅぐちゅ。

「やだあーもっといっぱい出すの！はむっ、ちゅっ…んっ。」

「だめえ！私壊れちゃう！からあ！んっ!?はぷっ、れる、んむっ…。」

小町は射精しようとお構い無しに突く。

次第に弱まる射精も出したばかりの敏感な肉棒が立て続けに達してまた射精する。

既にパンパンになった子宮はその大量の精液を受け止め切れずに陰部から溢れ出てしまう。

小町の動きが止まったのは三回ほど立て続けに射精した頃だった。

ぴゅ…ぴゅる…。

「はあ…はあ…はあ…小町、お姉ちゃんの中なら何回でも…出せそう…。」

「あ、あっ…ひゃ、ん…。」

その頃にはお互いにヘトヘトで小町が俺にのし掛かるようにして肩で息をしていた。

俺にいたってはイキ過ぎて言葉も喋れず意識も飛びかけていた。

「お姉ちゃん……このまま寝ていい？」

「ん、あ……あ、ふう……。」

上手く言葉が喋れずに俺は何とか首を縦に動かして了承する。

もうダメ……。

「お姉ちゃん。おやすみなさい。」

その言葉を聞きながら俺は意識を手放した。

—小町編end—

あのまま寝た俺と小町は目が覚めると遅刻ギリギリで俺は慌てて母と偽って学校に連絡をし、小町は朝御飯も食わずに中学に向かった。

そして学校に連絡をした俺は…。

「…んっ。」

こぶっ。

膣と子宮に溜まった小町の精液を腹筋に力を入れて出して出してる訳で。ベッドにタオルを引いてその上にティッシュを大量に用意してそこに精液を出す。

「んっ、く…はぁ。」

ぶちゅ、こぼお。

「…出しすぎだろ。これ。」

何とか出し終わって下を見るとティッシュでは受け止めきれなかったのかその下のタオルまでにも精液が流れている。

「はぁ…掃除しよ。」

「うしっ、こんなもんだな。」

あれから部屋を掃除したりシーツを洗ったりとバタバタして、たった今洗濯を干し終わった。

「ヤバイな。俺マジでいい女だろ。」

掃除して洗濯してマジで主婦の鏡。誰が養ってくれないかなー。無理か。

「…バカなことやってないで風呂入ろ。」

風呂場に向かって脱衣場で服を脱ぐとドレッサーの鏡に自分が映る。

知らない女性の裸を見てしまった様な罪悪感があるが自分の体なんだよなあ。

むにゅ。

「んっ…。」

自分の胸を掴むと当たり前だが鏡の中の女性も同じよう動く。
くにゆ、くり、むに。

「あ、はっ…んっ。」

次第にヒートアップしていくが視線は鏡から外さない。いや、外せない。

ぐにゆ、ぐっ、ぎりっ、むにゆ。

「はっ、ああ、んっ…くううう…。」

両手の指で双丘の頂にある乳首を強くつねりながら引つ張る。

「あ…はあああ…。」

下腹の奥にある子宮が収縮し、それが背筋を駆け抜けて脳髓に直撃する。

その快感に脚が震えて立って居られなくなる。

ドサツ。

「はあ…はあ…。」

後ろの壁にもたれるようにして座り込む。

どうして女の身体はこんなにも気持ちいいのだろう。

浅く乱れた息をしていると陰部から愛液が溢れて菊門に伝う。

俺…いや、私はゆっくり陰部に手を伸ばす。

くち。

「あんっ。」

陰部をなぞるように指を這わすだけで声が押さえられず、脱衣場に声が響き更に私を興奮させる。

もうここまで昂った色欲は抑えられる訳もなく、私は両手で必死に陰部を愛撫する。

くちゆ、にちゆ、ぐちゆ、くりくりゆ。

「あ、あ、んっ、ああ…んあ。」

右手の中指と薬指でトロトロになっっている膣を掻き回して左手の親指を除く指四本で既に膨れ上がって剥き出しになっている陰核を擦りあげる。

足の指先から頭の天辺まで幾度となく快感と言う電気が駆け回り、私を狂わせる。

ぐちゅぐちゅくち、くりゅくりゅくりゅ。

「んあ、いく…いくいくいくうううう!!」

プシュ、プシャ。

気付けばもたれていた壁からずり落ち、床に寝そべる様にして自慰行為をしていた私は弓なりに反ってブリッジの様になりながら果てる。

「はあ…はあ…ん。…あん。」

くぶ、こぼ。

まだ陰部に添えていた右手に暖かい液体が溢れ出る。右手を顔の前に持つてくるとそれはまだ子宮に残っていたらしい精液だった。

射精されてから時間がたったそれは臭いと言ってもおかしくない匂いを放っていたが、私は吸い寄せられるように精液が付着した指を舐める。

「はむっ…ん、ちゅる、ちゅ、ぴちや、あん…ん…れる、ちゅく、…ん、ぐちゅ、ぐちゅ…ごくつ。…はああ…美味しい…。」

私は執拗に舐めて吸って咀嚼して味わってから飲み込む。

美味しいはず無いのに牝としての本能か極上のジューズのように美味に感じてしまい、その味と匂いで軽く果ててしまう。

ガタツ。

「っ?!誰だ!!」

突然の物音に我に還った俺は扉の方を見る。

そこに居たのは…。

「い、いえ、その…ご、ごめんなさい!」

扉の隙間から覗くのは雪ノ下だった。

―続く。

キャラ設定?

比企谷 八恵香

追加設定

自身も自分の愛液を飲めばふたなり化可能。

彼女の愛液を飲む量によってふたなりの大きさに変動がある。
ふたなりの大きさは平均位。

Case Yukino Ep. 5

そこに居たのは雪ノ下だった。

その扉の間から見える艶やかな黒髪に少し切れ目大きな瞳は驚き見開かれおり、その下にある頬は赤く染まっている。

いつから見ていたのかは分からないが自慰行為の一部を見られたのは確実だ。もしかしたら全て見られていたのかも知れない。

「あ、あの、これは、だな。」

「ご、ごめんなさい!」

何とか言い訳をしようと立ち上がろうとするとビクツとしてから雪ノ下が謝り、立ち去ろうとする。ヤバイヤバイ。

「ちよっ!? 待って…。」

ズルツ。ゴンツ!!

立ち去ろうとする雪ノ下に焦ったのが運のつきだった。

自分の愛液で足を滑らし思いつきり頭を床にぶつけてしまい目の前が暗転する。

…だせえな、俺。

「…へ?」

意識を失う中見たのはいきなり盛大に転けてしまった俺にびつくりする雪ノ下の顔だった。

「……………っう!」

ゆっくり意識が覚醒していき体を起こすが頭の痛みが走る。

「ここは…俺の部屋か。」

痛む頭に手を当てながら体を起こして見ると自室のベッドで寝ていた。

ガチャ。

「あら、目が覚めましたか。」

「ゆ、雪ノ下。」

「どこかでお会いしましたか? いえ、それより打った頭は大丈夫ですか?」

雪ノ下はベッドのすぐ横に近付いてくると俺の前髪を手でかき分けて打った部分を診てくれている。

「い、いや、大丈夫だから。」

「そうみたいです。音の割には小さなたんこぶだけみたいですし。」
優しく患部を撫でて手を離して安堵したように微笑む。

つか、なんかおかしくね？主になんかよそよそしいつか…あ、そうか、俺が女になったからわかんねえのか。

「あー雪ノ下？」

「どうかしましたか？」

「とりあえず敬語やめろ。俺だから。比企谷八幡だから。」

「…？」

あら。キョトンとしたまま首を傾げるゆきのんテラかわゆす。つてそうじゃなくて。つか、キモいし。あとキモい。

俺の言った言葉が理解不能だったのか反対側にも首を傾げて頭の上にクエスチョンマークが見えるな。↑幻覚

「信じられんかもしれんが俺は比企谷八幡なんだよ。」

「…あの、大丈夫ですか？」

「頭は正常だよ。」

雪ノ下が俺の頭を撫でながら心配されたのでその手を掴んでやめさせる。

「…確かに目は比企谷君なのだけけど、信じがたいわ。」

「なんで目なの？性転換しても目は治らないのはガチで落ち込むからやめろ。いや、だから本当なんだよ。」

マジで落ち込む。目から汗が止まらないぜ。

「…ごめんなさい…。やっぱり半信半疑ね。なにか証拠とかはないのかしら？」

「証拠…。」

「ないのかしら？」

いや、あるにはあるが…正直言いたくないんだが仕方ない。

「…本物…俺は、本物が…ほしい。」

「…信じるわ。」

「そうか…／＼／＼」

くそ。恥ずかしい。

だが、これで疑いは晴れたわけだがどうしたもんかな。

「…女の身体になってあんなことしてたなんて変態ね。」

「…………え？」

雪ノ下の言葉にそっちに顔を向けると軽蔑するように…しかしどこか妖艶な笑みを浮かべた雪ノ下が俺を見つめていた。

―続く。

これは誰だ？

よく知った雪ノ下の顔は今まで見たことのない妖艶な笑顔が浮かんでいる。

その瞳には侮蔑の色が滲んでその笑顔と相成って子供が好奇心で虫を殺してしまう様な印象を受ける。

「…え？」

雪ノ下の変わりようといきなりの質問にマヌケな返事をしてしまう。

「女の身体になってマスターベーションに熱中してたんでしょ？私が入って来るのに気付かないほどに…ね。」

「え、いや、その。」

雪ノ下から自分がしていた事をはっきりと言われて顔が赤くなるのが分かり、口ごもってしまう。

「どうしたのかしら？はつきりと貴女の口から聞きたいのだけれど。」

横髪を耳にかけながら俺を見つめるその目は捕食者の様に目を細められ、ゆつくりとこちらに近付いてくる。

雪ノ下から漂う甘い匂いはいつもの見馴れている俺の部屋を違う場所に変えてしまう様な気がした。

「ほら、言いなさい。」

「あ…。」

雪ノ下の手がこちらに伸ばされ、その綺麗な手から伸びる細い指が俺の…いや、私の唇に触れた。

その指は少し冷たい筈なのに触られた唇は熱く熱を帯び、私の唇は勝手に動く。

「わ、たしは女の子になって…オナニーを、して、ました。」

「いい子ね。」

「ん、むっ、んう…。」

頭が働かず、まるで夢を見てる時みたいな感じがして途切れ途切れになりながらも何とかいい終えると雪ノ下は私の口の中に指を入れ

て舌を指で弄ぶ。

「でも、変態の貴女にはお仕置きが必要みたいね。」

「ん、えう?」

「ふふっ。」

私の舌を指で摘ままれて返事がおかしくなるが雪ノ下は楽しそうに微笑む。

「あ、ふっ…ん。」

「あら、口の端から涎が垂れてるわ…ん、ちゅっ。」

「ふあ…あ…／＼」

「んっ、コクツ…美味しいわ。」

舌から指が離れてそのまま顎を伝う涎を掬い自分の口に含み舐めて飲み込む。

その光景に私は身体が熱くなるのを感じて身を震わす。

「どうしたのかしら?」

「い、いや、あの。」

「もしかして、私の唾液が欲しいのかしら?」

「っ／＼／＼」

「凶星なのね。変態。」

「~~~~／＼／＼／＼」

雪ノ下の罵倒に身体が反応して下半身が疼く。

私が内腿を擦り合わせるとそれを見た雪ノ下はまた楽しそうに微笑む。

「じゃあ、飲ませてあげる。その代わり一滴も溢してはダメよ?」

「ありがとうございます。」

反射的にお礼を口にする私の顔はどうなっているのだろうか。

羞恥しんで困った顔?

悔しさと怒った顔?

屈辱で悲しい顔?

近くにあった姿見に自分の顔が映る。

そこに映ったのは舌を出して息を荒げている『笑顔』の女。

直ぐにそれはベッドに膝立ちで私のふとももを跨ぐ雪ノ下に遮ら

れたが、私の中の何かを壊すのには十分だった。

「ふふっ。かわいい。」

「はっ、はっ。」

雪ノ下を見上げる。

艶やかな髪が私の顔を擦り、私を蔑んだ見下ろして『くれる』瞳、唇は楽しそうに上がり、その間から覗く舌は小さくかわいい。

ああ、何て綺麗なのだろうか。

ゆつくりと雪ノ下の手が私の頬に添えられて優しく固定される。

力なんて少しも入っていないその手は私からすれば鉄の鎖より頑丈な拘束具だろう。

「口を開けなさい。」

「…はい。あー。」

「いい子。」

早く…早く来て。

「くちゅ、ぐちゅ…んっ。受け取りなさい。」

雪ノ下が唾液を口内で溜めて見せ付ける。

私は我慢が出来ず雪ノ下の細い腰に腕を回して抱き着いて必死に舌を伸ばしておねだりをする。

飲ませて。

早く早くお願い。

そんな私を見た雪ノ下は嬉しそうに笑いながら唾液を垂らした。
— 続く。

Case Yuki no Ep. 7

口を開けて舌を出す雪ノ下。

その先端からキラキラと光る透明な唾液がゆつくりと重力に従って垂れ始める。

トロー、ポタツ。

「れー。」

「あー…んっ、あむっ…んう。」

「美味しい?」

「くちゅ、くちゅ、ちゅ、ぐちゅ…んっ、ごくっ…美味しい、です。」

溢さないように注意しながら受け取った唾液を咀嚼してちゃんと味わってから飲み込む。

すると唾液が食道を通る感覚が分かり、私の一部になるとわかると身体が勝手に愛液を分泌したのがわかった。

雪ノ下は私の返事に満足したのか微笑むと私の耳を優しく弄りながら聞いてくる。

「次はどうしたいの? 貴女の口から言いなさい。」

その問いに私は悩む。

したい事はあるが怒られるかもしれない。

「どうしたのかしら?」

「あ、あの、怒りませんか?」

「あら? 怒られるような事なのかしら?」

「わかりません。」

恐る恐る聞く私に雪ノ下はクスクスと笑うと意地悪く質問を質問で返してくる。

その時に首を傾げるものだからその凶悪な可愛さにクラクラする。

「いいから言いなさい。」

「じゃあ…雪ノ下の、足を舐めたい、です。」

「…本当に変態ね。」

「…ごめんなさい。」

雪ノ下は私を見下ろしながらベッドから下りる。

やっぱりダメだった。

きつと嫌われたし、軽蔑もされただろう。

そんな絶望の中でも小さな悦びが芽吹くのを感じるのは私が壊れているのかもしれない。

でも、嫌われて独りになるのはいやだ。

ガバツ、ガシツ。

「ごめんなさいーもう言いませんからー見捨てないで」

「きやつ!？」

だから私はベッドから慌てて飛び下り、雪ノ下の腰にしがみつく。

雪ノ下は背後から抱き着かれて小さな悲鳴と共に驚いている。

「…ふう。離しなさい。別に見捨てないわ。」

「んっ…。」

呆れたように溜め息を吐きながら雪ノ下は私の頭を優しく撫でてくれて私はそれだけで心がポカポカと暖かくなる。

「私の足を舐めたいんでしょう?それなら私は座りたいわ。」

「う…ごめんなさい。」

先程の自分の言動に顔が赤くなる。

スツ

「いい子ね。」

「……………」

ギシツ

「服は全て脱ぎなさい。」

「…はい。」

雪ノ下は私の勉強机にある椅子に腰掛け足を組む雪ノ下は無慈悲に命令をする。

私はそれに従い雪ノ下が見ている目の前で恥ずかしくて震える手で服を脱ぎ始める。

来ていた服はTシャツとショーツだけだったため直ぐに脱ぎ終えて恥ずかしくて手で胸と局部を隠して雪ノ下の前に立つ。

「手を退けて始めなさい。」

「っ!?!…はい。」

手を退けて雪ノ下に裸体を見せる。

雪ノ下は隅々まで私を見るその目に身体の内側が熱く火照りオマ
ンコから愛液がふとももを伝う。

雪ノ下が満足そうに微笑むのを確認してからその場に座り込み靴
下を脱がせて綺麗な足にキスをする。

「…ちゅっ、んむっ、ちゅぴ、ちゅ、んっ、はっ…おいひい…。」

「ん、ふふっ…指の間もちゃんと舐めるのよ?」

「んふう、ふあい。」

言われた通りに指の間にも舌を這わせてそのまま数本の指を加え
て口内でも舐めるの止めず必死に味わう。

「…かわいいわよ。」

くちゅり。

「んんっ!んむう…。」

雪ノ下は反対の足で私のオマンコを弄り出す。

いきなりの刺激に悶えて雪ノ下を見上げると意地悪く微笑む彼女
は何も言わない。

「ほらこっちも舐めたいんでしょ?」

そう言っただけ彼女は制服のスカートの裾をを持ち上げて白いシヨ
ーツを見せつける。

「はい、舐めたいです…。」

「脱がせて頂戴。」

「はい。」

彼女のシヨーツに手をかけると腰を浮かせて脱がしやすくしてく
れる。

脱がし終わるとそこに現れたのは穢れを知らない綺麗な華だった。

それは甘い匂いがする蜜が溢れ、私の嗅覚を虜にしてしまい気付け
ばそこに口付けをしていた。

「ん、はむっ、ちゅっ、んちゅっ、あむ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅぴ、れ
ろ。」

「あ…はあ、んっ…そんなにがつついて…美味しい?」

「ちゅぱ、はあ、おいしい…おいひい、んちゅっ、れふう、あむっ。」

一心不乱に食べる私の髪を掴み、身を振りながら問う彼女に私は口付けを止めないまま自然と見上げて答える。

彼女は感じていて時々上を向くように首を反らして綺麗な喉を見せる。

そして、その喉から漏れる声は艶やかで私の耳を犯す。

味覚、視覚、聴覚、触覚、嗅覚の全てを虜にされてしまったのだ。

そのあまりにも甘い誘惑に抗える訳もなく私は彼女が満足するまで食べるのを止める事は出来なかった。

―続く。

綺麗な花卉に口付けを始めて何分たったかわからない。
数分？

それとも数十分？

それも分からないほどに私は夢中に食る。

こんなことを考えつつもどうでもいい。

私は彼女が『もういい』と言うまで花卉から滴る甘い極上の蜜を啜るだけなのだ。

「んちゅっ、ちゆる、んくっ、んっ、ちゅっ、ちゅび、れろ、んむっ、ん。」

「あん、ん…上手ね。あつ、気持ちいいわ…。」

彼女に褒められ嬉しくなり丹念に舐め続ける。

時折、感じていているのか私の髪を掴んでいる両手に力が入り引っ張られて痛いを感じてくれるか私の髪を掴んでいる両手に力が入り引っ

「あ、はあ…んんっ、もう、いいわ…止めなさい。」

「…んう、ちゆるる、ちゅぱ…はい。わかりました…。」

「はあ、んっ…ふふっ。そんな顔しないで。」

「んっ…。」

待てを言われてもう終わってしまったと残念な気持ちになりながらも絶対的な主である彼女の言うことを聞かないわけもいかない。

花卉の周りに滴る蜜を啜り綺麗にしてから顔を離す。

しかし、名残惜しい私は彼女を見上げる様に見つめると微笑みながら顎を撫でてくれ手に心地よくて目を細めてしまう。

「身体が火照って暑いわ。脱がせてくれるかしら？」

「あ…はい／＼」

椅子から立ち上がり髪を払いながらそう告げる。

その際に少しだけ見えたうなじにはしっとり汗が伝い、凄く綺麗なだ。

私は少しの間見惚れてしまったが直ぐに返事をして彼女にすり寄る。

まず私は膝立ちの状態のまま制服のスカートに手をかけた横の部分にあるジツパーを下ろしてフックを外して脱がせる。

床まで下ろすと片足ずつ少し持ち上げてスカートを抜き取り丁寧に畳んで置く。

次にブレザーのボタンを一つずつ外してから彼女の後ろに回って肩が痛くならないようにゆっくりと下に下ろすようにして脱がせて皺にならない様にハンガーにかけて吊るす。

「ふふっ。」

「どうかしましたか？」

ブレザーを壁に吊るして振り返ると彼女はこちらを見て小さく笑っていた。

私が首を傾げると彼女は首を横に振る。

「貴女がとつても優秀なメイドか凄い良妻に見えてしまったわ。なんだか癒されるわ。」

「うっ…ありがとうございます…ごいいます。」

手招きをする彼女に近寄ると褒めながら優しく頭を撫でてくれるものだから私は照れながらもお礼を言う。

「本当に私の家に欲しいくらいよ。」

「うう…／＼」

「ふふっ♪では、続けて。」

「…はい。」

優しく微笑む彼女を目の前で見た私は恥ずかしくて顔を赤くなるが続きを促され再開する。

次にリボンを外す。

その際に間違っても首がしまっってしまったないように首とリボンの間に指を差し込みながら端を引っ張って解いて畳んであるスカートの上に乗せる。

そうしてブラウスのボタンに手をかける。

ここにきて私の緊張は急上昇して震える手で上から一つずつボタンを外していく。

最後の一つを外すと前がはだけて綺麗な肌が露出する。

そのシミ一つない綺麗な肌に生唾を飲み込んでしまう。

「手が止まってるわよ?」

「ご、ごめんなさい!」

見惚れていた私は彼女に指摘されて慌てて彼女の後ろに回り、ブレザーと同じ様に脱がせて畳んでスカートの上に置く。

そして最後にブラを外すのに髪を掴んでしまわないように纏めて彼女の肩から前に流してからホックを外して脱がせた。

髪の毛を元に戻してから彼女の前に立って報告をする。

「終わりました。」

「ありがとう。それで?」

「へっ?」

彼女は髪を払いながらいきなりの質問をしてくる。

「私の裸を見たのよ?感想はないのかしら?」

「あ…／＼はい。その、綺麗です／＼」

「そう。でも、察しが悪いわね。お仕置きよ。」

「うう…はい…／＼」

彼女は満足げに笑みを浮かべるが容赦はなかった。

「そうね…ベッドに四つん這いになりなさい。」

「そ、それは…。」

「早く。」

「…はい／＼」

恥ずかしくて抵抗しようとするが彼女が強い口調で命令を下し、私はベッド四つん這いになる。

「口答えした罰も上乘せね。」

「ひゃっ!」

彼女は私の後ろに座りお尻を撫でながら罰を下す。

「そういえば、貴女がマスターベーションをした時の精液は誰のかしら?」

「んっ、そ…それは…。」

「それにあの精液は女性器から出てたわ。」

「あん、んんっ。」

「もう、処女膜は破れてる…：そうなのね？」

「んあつ、そ、そう、んっ…：ですう。」

最初は優しく撫でるだけの彼女だったが、その手は質問していくに連れて荒々しくなっていく。

「そう…：知らなかったわ。私はこんなにも独占欲が強いよね。」

「んああつ…：はあ、はあ。」

最後に爪痕が残るんじゃないかと思うほど強く掴まれてから手が離れて私は乱れた息を何とか整えようとする。

くちゅ。

「はあ…：へ？」

「膜がないなら指を入れても問題ないわね。とりあえず、10分程掻き回すから好きにだけ果てなさい。」

「え、ちよつ、待つて。」

ずちゅ。

「ダメよ。」

「ひっ、ああああ!!」

彼女は冷たくいい放つといきなり二本の指を膣内に挿入する。

急な快感に大声を上げてしまい身体が弓なりに反る。

「ほら、果てなさい。」

くちゅくちゅくちゅずちゅくちゅくちゅじゅぶ。

「あああ!!ダメ!イクイクイク!あああああ!!!」

彼女は容赦なく指を小刻みに高速で動かし、私を責めたててものの数秒で達してしまうが先程言った通り彼女は責めるのを一切ゆるめない。

くちゅくちゅじゅぶくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ。

「まだ1分もたつてないわよ?」

プシユ、プシヤ。

「あああああ!やめてえ!!イッてる!今イッてるのおお!あつ、またイクううう!!!」

立て続けに何度達しても彼女は許してはくれずに予告した通り10分の間掻き回され続けた。

ぐちゅぐちゅぐちゅ、じゅぽ。

「10分たったわね。おしまいよ。」

プシャアアア。

「あ…ひっ、あ…あ…。」

彼女は作業でもしてたかの様にピッタリの時間でやめて指を引き抜く。

その時に指を曲げてGスポットを抉られて私は何度目かもわからない放尿をしてしまう。

10分もの間絶頂させられ続けた私は意識はとびとびで呂律も回らず上半身を支えてた腕も一切の力も入らずに投げ出して枕に顔を埋めてお尻をつき出す様な体勢でピクピクと痙攣をすることしか出来ない。

「感じ過ぎて声も出ないみたいね。」

「う…あ…。」

私の隣で横になった彼女はその手に付着している愛液を見せ付けてくる。

「見なさい。こんなにもトロトロ…滴りもしないわよ?」

「あ、はあ…。」

汚したお詫びに綺麗にしようとその手を舐めようとすると手を引っ込めてどこか拗ねた様な彼女はおもむろに愛液が付着した手を舐め始めた。

「んっ、ちゅっ、ちゅぱ、ふっ、んっ…ちゅ、ちゅび…美味しい。」

「ああ…ぐ、めん、なふあい…。」

まだ呂律が回らないが何とか謝るが彼女は聞いておらず、私を睨みながら口を尖らせて呟く。

「もう貴女は私のなの…だから例え貴女自身でもあげないわ。私が全部貰うのよ／＼」

呟いた後に彼女はそっぽを向く。

そんな可愛らしい彼女にときめく。

しかし、彼女に変化が起きる。

「ん、なんだか…熱いわ。」

「…んう？」

彼女は苦しいのか四つん這いになって苦しむ。

私は痙攣する身体に鞭を打って何とか起き上がると彼女に寄り添う。

「熱い…下半身が、熱い！んあああ!!」
ずりゆりゆ。

私が見たのは四つん這いになった彼女からペニスが生える瞬間だ。

小町同様に彼女も生えてしまったのだ。

しかし、それは小町とは違い長い。

太さは小町よりは細いが長さが異常だった。

「はあ…ん、これは？」

彼女が荒く息をしながら仰向けに倒れて自分に生えたモノに困惑する。

仰向けに寝てペニスの異常な長さわかる。

少し柔らかいかいらしいペニスは重力に負けて雪ノ下の身体にへばり付くが先端が臍を越えて鳩尾近くまでであるのだ。

私は生睡を飲み込んでそれを凝視してしまう。

―続く。

私は目の前で横たわる彼女から目を離せない。

正確には彼女の下半身に生えたペニスを見つめてしまう。

彼女のペニスは長くて重力に負けたところを見ると少し柔らかい
のかもしれない。

「どうかしたのかしら?」

彼女に声をかけられてハッと我にかえる。

恐る恐る彼女を見つめると新しい玩具を見付けた子供の様な笑顔
で私を見つめていた。

「凄く物欲しそうに見つめていたわね。」

「い、いや、ちが。」

私の心を見透かした様な彼女の言葉に動揺して口ごもってしまう。

「なら、いらないのね。残念ね。」

「っ!?!ごめんなさい!欲しいです!!」

彼女はつまらなそうに言い捨てた後に体を起こす。

私は見捨てられると思えば彼女にすがり付いて本音をぶちまける。

すると彼女はそんな私を見て小さく身震いをしながら口の端が上
がり、笑う。

「ふふふっ…なら、どうしたいの?私が満足出来る言葉で言いなさ
い。」

彼女は意地悪く笑みを浮かべたままにおねだりを要求する。

彼女の『満足』それはきつと彼女を『興奮』させる様に言えと言う
ことは私でも簡単にわかった。

だからわたしは…。

「わ、たしは…雪ノ下…うん、お嬢様の、オチンポを私の口で…喉も
食道も全部使って、オチンポの根元まで…ご奉仕…させて下さい
…。」

私は彼女を見上げる様に見つめて私の頭の中にある卑猥な言葉を
繋ぎ合わせてお嬢様が満足出来るようにおねだりをする。

お嬢様は自分で自分を抱き締める様に二の腕を掴んで先程より強

く身震いをする。

その顔に浮かぶ笑みは意地悪などと言う拙い言葉ではなく、見てい
るこちらが発情してしまいそうな程の姪猥な笑顔で私を見下ろす。

「あ…はあああ…いいわ。合格よ。」

「はい…ありがとうございます。」

お嬢様からのお許しをもらって私はお嬢様オチンポに口付ける。

「んっ、ちゅっ、はむっ…ちゅる、ちゅっ、ぺちや、じゅぶ、じゅぶ。」

手は使わない。多分そつちの方がお嬢様が喜ぶだろうから。

そしていきなりは奥までは呑み込まずに龟头を中心にカリ首や鈴
口を綺麗にするように丁寧に舐める。

「気持ちいいわ…。」

「んふっ、ちゅぽ、ちゅぽ、くぶっ、ちゅば、じゅぶ」

お嬢様は私の頭を優しく撫でながら褒めてくれて嬉しくなり、龟头
を吸いながら頭を上下に動かして奉仕を続ける。

「…八恵香。」

「…ふう、ん？」

お嬢様がいきなり知らない名前を呼び私は先端を加えたまま首を
傾げる。

お嬢様は少し恥ずかしがりながらも私を見つめながら優しく言っ
てくれた。

「貴女の名前よ。女の子の姿で八幡では困るわ。だから女の子の貴女
の名前…嫌かしら？」

「うん!?~~~~~／／／」

「気に入ってくれたかしら？」

お嬢様から名前を貰い嬉しくてでも恥ずかしくて俯いてしまう。

少し不安そうなお嬢様に私は行動で示す。

「ごりゅ、ごりゅ、ごちゅ。」

「ふっ…んぐっ、ぐぶっ…フウー、フウー。」

「ふあ!?んっ…／／そう、気に入ってくれたのね。」

私は龟头を加えただけの状態から一気に根元まで呑み込む。

オチンポが喉を削る音が直接鼓膜に響くし、異物を吐き出そうと嘔

吐感があるが私は根元まで加えるのを止めない。

そしてそのまま私は笑みを浮かべる。

涙目で口からは涎を垂れ流し、もしかしたら鼻水も出てるかも知れない。

きつと不細工な笑顔なんだろうけど…それでもお嬢様は喜んでくれた。

「ほら、口が止まってるわよ？気持ちよくしてちょうだい。」

私はコクコクと頷いて動きを再開する。

ずるる…ごりゆごちゆ。

ずるる、がちゆ。

ずる、ごりゆごりゆ。

ずつ、ごりゆ。

ごちゆ、ごちゆ。

「んぐつ、ごごぶつ、んつ、ふぐう、ん、ぐぼつ、ぐうん、ごごぶつ、んんぐつ、ぐぶう。」

「あ、ああ…八恵香の喉をも食道も凄いわ…こんなに気持ちいいの直ぐに、射精る!!」

ごちゆん。

びゆる、びゆるるる、びゆー、びゆー。

「んぶつ?!んぐつ、ごくつごくつ、んぐつ。」

「ああっ!!うう、くつ…くう、あつ／＼」

まだ、オチンポからの快感に馴れていないお嬢様は私の頭を掴んで強引にオチンポを喉の奥に挿入して精液を吐き出す。

その量は私の胃をパンパンに膨らませて濃さは固形物の様にどろどろで食道や喉にへばりついてしまう程だった。

そうして長い射精が終わったお嬢様はずるりとオチンポを引き抜く。

その時にちゃんと尿道に残った精液を吸うのを忘れない。

「はあ、はあ…。」

「あ、んくつ…ちゆつ、ぴちや、れろ、れろ、ちゆぶ、ちゆつ。」

むせそうになるが、それより私の唾液と精液で汚れたオチンポを舐

めて掃除をしてから口内に残った精液はまだ飲み込まない。

「いい子ね…見せて。」

「…ん、れー。」

「いいわよ。よく味わって飲みなさい。」

「ふあい…くちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、ん、くっ…ぐくっ…れー。」

「ありがとう。八恵香。」

一度お嬢様に口内に溜まった精液を見せてから咀嚼して飲み込む。

そしてちゃんと全部飲み込んだ事をわかるようにまた口内を見せる。

「次はそのトロトロのマンコを掻き回してあげるわ。」

「…はい／＼／＼」

お嬢様は私の頭を抱き締めて一緒にベッドに横になり、額にキスをしてくれて私の心臓は早鐘をならすのだ。

— 続く。

お嬢様は抱き締める腕を離して私の横で仰向けになって見つめてくる。

何をすればいいのかわかったけれどお嬢様に命令して欲しくて見つめ返す。

「命令、して欲しいのかしら？」

「…はい／＼／」

お嬢様は私の気持ちを汲んでくれて嬉しくなり、顔が緩む。

「まったく…仕方ないわね。」

呆れたように渋々お願いを聞いてくれるお嬢様だが、その顔は楽しそうな笑顔で素直じゃないお嬢様を可愛いと思つて早く言つて貰えるようにお嬢様の乳首を舐めておねだりを続ける。

「あ、ん…私に跨がつて奉仕してちょうだい。」

「はぶっ、んっ、ちゅっ…はい／＼」

一度乳首から口を離して立ち上がり、お嬢様を跨いでゆつくりと腰を落としていく。

膝を可能な限り開いて自分のオマンコがお嬢様に見えるようにするのを忘れない。

ある程度腰を落として一度止まり、お嬢様のお腹にくっついているオチンポを手に取りオマンコに宛がう。

「ゆつくりと八恵香の膣も子宮も全て使うのよ。わかったかしら？」

「はい。嬉しいです。」

お嬢様の申し付け通りに全てを使うためにまずはオチンポの亀頭を私の外陰部全体を使って愛液を塗り付ける。

くちっ、くちゅ、くちゅ、ちゅく。

「はっ、あ、あ、んっ、うん。」

「八恵香のヴァギナ柔らかくて気持ちいいわ。」

お嬢様は乱れる私を見てくれていて私は我慢できなくなってまたおねだりをする。

「はっ、あっ、も…だめ、です。いれ、ます、んっ。」

「いいわ…でも、いきなりはダメよ。ゆっくりと味わいなさい。」

返事をする余裕もなくして私は膣口に亀頭を宛がいゆつくりと呑み込んでいく。

つぶつ、ずつ、ちゅ、ずぶぶ…。

「あ、はあああああ…ん、ふう…ん。」

「凄いわ…キツくて熱いわ。それなのに柔らかくて凄く気持ちいいわ。」

初めての快感にお嬢様は口を開いてうわ言の様に感想を言っており、私はその言葉だけで嬉しくて更にオチンポを締め付ける。

しかし、私のオマンコではお嬢様の長いオチンポは全て入らずに3分の1位を残して子宮口に当たる。

その瞬間に背筋を電流が走り絶頂して、腰が抜けてしまい腰に力が入らずに容赦なくオチンポが子宮口を押し上げる。

ぐりゆ、ぐりゆ。ぷしゃ、ちよろろ…。

「あがつ、ぐつ、ぐ、めん…なさい…ふつ、んうううう!!」

「あ、んつ…凄い締め付け…。でも、粗相して…お仕置きね。」

完全に腰が抜けた私は下腹部に力が入らずに尿が漏れてしまうがお嬢様は嫌な顔はしていないが私の腰を両手で掴んで告げる。

そのまま腰を突き上げながら押さえつける様に手に力を入れて子宮口を突く。

ぐりゆ、ぐりゆ、ぐちゅ、ごりゆ。

「ふつ、ん、八恵香…呑み込みなさい…命令よ。」

「っ!?!」

ごりゆ!ばちゅ!!

「ひっ、あ…。」

お嬢様が腰から手を離して痕が残る程に私の腕を握りしめて上半身を起こして耳元で囁き、命令してくれる。

脳が理解するより早く私の身体は反応し、それに従う。

先程まで頑なに口を開かなかった子宮はその錠を外してオチンポを受け入れる。

そうして残った3分の1全て呑み込み子宮を中から突き上げられ

て私の意識は飛んだ。
— 続く。

特別編 お前とのバレンタイン

ガラガラ

学校特有の騒がしい引き戸が横にスライドして教室に入る。

彼女は……いた。

「。』」

「……おはよう。」

「。』」

「あん？なんだよ。」

彼女こと比企谷 八恵香は眉を潜めて怪訝な表情で此方を見ている。

「。』」

「バレンタインデー？ああ、あのお菓子会社の陰謀が渦巻く日か。」

「。』」

「本当のことだからな。俺は間違っていない。」

ドヤ顔で腕を組んで答える八恵香。

腕を組んだ際にその体に似合わず大きめの胸が強調される。

女体化した彼女はまだ女としての自覚が足りないのか無防備で心配になるばかりだ。

「。』」

「はあ!?何で俺がお前なんぞにチョコをやらねえといけないんだよ。」

「。』」

「はっ、寧ろ俺が欲しいまである。」

「。』」

「いや、ないからな？そんな社会の陰謀なんぞに帆のかさされてチョコを買う俺ではないからな。」

彼女はやれやれと肩を竦めて小馬鹿にしたように言う。

仕方なく諦めるしかないのとおりあえず朝のHRはそのまま彼女と雑談をして過ごす事にする。

「いや、帰りなさいよ。」

「。』」

ガラガラ

「ホームルーム始めるぞー。」

しばらくするとこのクラスの担任である平塚先生が入ってきてお聞きになる。

「ちつ…貴重な睡眠時間を削りやがって…。」

「――。」

彼女は恨めしそうに此方を睨むが仕方ないと右手で頭をかく。

それは彼女が照れ隠しの時によくする行動だ。

いつも一人だった彼女が少しは楽しくなれば嬉しいな…何て思うのはありがた迷惑なのだろうか…。

ブブブ

自分の席に戻るとポケットに入っているスマホが震える画面を見るとトークアプリのメッセージが来たみたいで開くと彼女からだつた。

『まあ…お前と話すのは嫌いじゃないがな。』

絵文字も顔文字もなくて凄くぶつきらぼうな言葉だがそれには彼女の優しさが満ち溢れている。

彼女のこんなところは凄くあざといかもっと心の中で思い苦笑してしまう。

そんなことを思いながら一日は過ぎる。

放課後に平塚先生に捕まってしまう遅くなってもう辺りは暗い。

放課後に彼女に会いに行く予定が潰れてしまったため息を吐きながら下駄箱の靴を取り出して履く。

歩き出すと玄関には彼女が壁にもたれ掛かり待っていた。

「…よお。遅かったな。」

「――。」

「…別にお前の為に待ってた訳じゃねえよ。」

彼女は頭をかく。

「あれだ。小町がお前にもチョコ渡すって言うから持って来たんだよ。」

」。

「後で小町に言つといてやってくれ。喜ぶから。」

」。

彼女の自転車だ。

しかし、自転車には乗らずに駅まで一緒に歩く。

」。

「…なあ。」

」。

駅が見えてくると不意に彼女は立ち止まり、振り返ると目が合う。

彼女が自分から目を合わせる何て珍しい。

「そんなに俺からチョコ欲しいのか？」

」。

「っ!？」

「……ほら…。」

彼女はケーキ屋でよく見る箱を少し小さくした物を突きだす。

」。

「勝手にしろよ。言つとくが小町が作ったやつ之余りで作ったやつだからな?勘違いすんなよ?」

顔を真っ赤にしてそう言う彼女を横目に箱を開けるそこにはマカロンが沢山入っている。

マカロンは見た目に反して作るのには少し手間がかかり、余った材料で簡単に作ると言うには程遠い料理だ。

」。

「…うっせ。」

彼女は真っ赤な顔のまま自転車に跨がり走り出す。

その背中を見えなくなるまで見つめてから駅に入り家に帰る。

――

家に帰ってお風呂に入ってベッドに座ってさっそく彼女からのマカロンを食べる。

ふわふわで甘くて凄く美味しいマカロンを味わうがあるものがあ

るのに気付く。

周りのマカロンで隠されていたように底からラツピングされた薄いピンクのマカロンはよく見るとハート型で中には小さな手紙が入っている。

袋を開けて小さな手紙を開くとそこには若干震えた字並んでいる。

『好きです。』

たった四文字の言葉だがその言葉は胸一杯に幸せが満る。

今日は寝よう。

明日また彼女に合うために。

横になるとスマホが震える。

『おやすみ。』

感想、聞かせてくれよ。

いや、やっぱいい。』
捻くれた彼女らしいメッセージに顔がにやける。
返事を送る。

』。

さあ、寝よう。

ベッドに横になり瞼を閉じて明日彼女が感想を聞いて真っ赤になりながらも嬉しそうに微笑む顔を浮かべながら意識を手放した。

おやすみなさい。

また、明日。

下腹部を襲う圧迫感と電流の様に背筋を伝い脳に流れ込む強烈な快感で意識が覚醒する。

時間にして数秒程だが完全に意識が飛んでいたらしくお嬢様に覆い被さるような体制なのがわかった。

徐々に意識が覚醒していくとお嬢様の長いオチンポが本来入らない：入ってはいけない場所、子宮まで突き刺さっているのがわかる。「あ、あ：うぐ。」

少し動いただけでも膣を子宮を擦り、意識が飛びそうになるがお嬢様にいつまでも覆い被さっている訳にもいかずに体を起こす。

すると私のへその辺りが不自然に盛り上がっていてそれがなんなのかは容易に想像がつく。

「くっ、ふっ：ん。」

お嬢様が不意に声をあげて私は見つめると目をきつく閉じて歯を食い縛り何かを我慢している様な表情でその一見苦しそうにも見える表情に反してオチンポは時おり嬉しそうに私の子宮の中で震えて、跳ねる。

「ふっ、ん：あ：：：お嬢様：：気持ち、いい、ですか？」

お嬢様は返事をしない。

その代わりに首を縦に振る。

「なら：：我慢しないで：：一杯気持ちよくなって下さい：：一杯出して下さい：：子宮がパンパンになるまで：：お嬢様のせーしでポテ腹になるまで：：出して下さい、ね？」

「っ!？」

お嬢様の耳元に唇を押し当てる様にして優しく子供を慈しむ母親の様に囁く。

お嬢様は目を見開いて私の体を腕ごと抱き締める。

力加減など無くて痛いくらいに抱き締められる私の体は痛みも快感に変わり、笑みが溢れる。

そして、お嬢様は動く。

始めから最速でペースなど考えずに私のオマンコを蹂躪する。
ばちゅばちゅばちゅごりゅごりゅごちゅばちゅ。

「あっ！かはっ！んぐっ…イク!!イキます！い、くうううう!!」

「はっ！はっ！んぐううう!!」

びゆる！びゅううううう!!

まず一発目は背中まで浮く程に弓なりに反りながら突き上げて射精する。

その濃くて大量の精液は子宮に直接出されてそこに溜まる。

そして出し終わる前にまた動き出す。

ごちゅばちゅぐぼつぐちゅばちゅごりゅ。

子宮からオチンポが抜けても関係なくまた力任せに挟じ開けて子宮を突き上げる。

その度に私の意識が飛びそうな…いや、飛んでいる。

しかし、また快感で意識が覚醒するのを繰り返す。

一見拷問の様に聞こえるかもしれないが私は歓喜している。

いつも冷静でクールなお嬢様がこんなにも情熱的な交尾をしてくれているのだから。

こんなにも私の身体に夢中になって一心不乱に腰を打ち付けるお嬢様が可愛くて愛おしくて…そして逞しいのだから間違っても負な感情など湧くはずがないのだ。

そして二回目の射精が始まる。

「あ、あ、ああああ!!」

「はあはあ…ぐ、くうううう!!」

ごびゅ！びるるる!!ばちゅ！

もうすでに二人は喋ることも辞めてお互いの身体を貪るだけの獣になっていて射精などお構いなしに動く。

お嬢様は私の体が持ち上がる程に突き上げ。

私はお嬢様を出来るだけ奥まで導くために動きに合わせて腰を振る。

ばちゅ！びゅっ！ぐちゅ！ごりゅ！ごちゅ！

「はあ、あぐ、んんっ。」

「あ、ああっ！はっ、 ああ!!」

あ、また射精る。

びるるる!!ぐちゅ!!ばちゅ!!ごびゅ!!ばちゅ!!

それからお嬢様は何度も射精して精液を出しながらもまた射精して、もうどれくらいの間時間がたったかも分からずに貪る私とお嬢様。

お嬢様の腕はベッドのシーツを掴んでおり、私は何となく身体を起こすとそれに気付いた。

私のお腹が妊娠したかの様に膨れており、お嬢様がそのお腹を見て嬉しそうに微笑むのを。

― 続く。

特別編 魔王の心は飴模様

「……なにしてるんですか?」

「ん?美人なお姉様が起こしてあげてるのよ。嬉しいでしょ?」

「全然。」

「即答!」

さて、今の状況はこうだ。

今日は日曜日でベッドの中で寝ていた俺の上に雪ノ下さんことはそのんが跨がって乗っかっているんだ。

おっと、うらやましいとか思った紳士諸君…超絶美人とは言えはるのんは魔王だぜ?

つか、マジで何でいるのん?

「とりあえず、退いてください。」

「八恵香ちゃんが冷たい。」

しゅんとしながらも俺の上から降ってきて体を起こす。

別にはるのんの柔らかいお尻の感触とか堪能してないから。本当だよ?」

「それで?なんの用ですか?」

「ふっふっふ…今日はなんの日でしょーか。」

えっと、確か今日は3月14日だったな…ああ、ホワイトデーか。

「ホワイトデーですか。」

「うん。当りだよ♪」

「…で?その日本のお菓子会社がバレンタインデーのお返しと称して経営戦略として日本に広めたお返しをする身としては本命以外は金銭的に負担でしかないそんな忌々しいホワイトデーがどうしたんですか?ん?」

「いつになく饒舌でお姉さんドン引きだよ。」

俺の舌は魔王をも怯ませる事が出来るのか。

ふっ…勝った。

「とこころでこれは?」

なんかスルーされたけど気にしない。強い子だもん。ぐすん。

「ああ、それはマシユマロですよ。」

机の上にあるラッピングされた袋を興味津々といった感じで眺めるはるのん。

それは昨日の晩に母さんから渡されたホワイトデーのお返しだ。

「食べますか？」

「うんー！」

雪ノ下さんはカサカサとラッピングを解いて中からピンポン玉より少し小さいハート型のマシユマロを摘まんで口の中に放り込む。

「あむっ…んー！おいひー♪…って、はれ？」

「雪ノ下さん!？」

口の中のマシユマロをもぐもぐと咀嚼して直ぐに顔が真っ赤になってその場にへたりこむ雪ノ下さんを辛うじて抱き止める。

「雪ノ下さん？大丈夫ですか？」

「んー…あはっ♪八恵香ちゃんらー♪」

ガバツ

「へ？って、うおっ!？」

「んーんふふ♪」

起こったことをありのままに話すぜ。

あの絶対君主の魔王がとろんとした顔で俺に抱き着いて胸に顔を擦り付ける様にして甘えてきたぜ。

「だ、大丈夫ですか？」

「うん♪平気…てか、聞いてよ!!」

「は、はひっ!？」

雪ノ下さんが俺に抱き着いたまま顔を上げて見つめてくるが顔が近い近い。

「私だって…好きでこんな仮面着けてるわけじゃないもん。仕方ないから…雪乃ちゃんには私みたいになつて欲しくないから我慢するしかなかったんだもん。」

「…ああーはいはい。わかっていますから…雪ノ下さんが頑張ってるのはわかっていますから。」

拗ねた雪ノ下さんはポツポツと愚痴をこぼしてる姿が自分より年

下な女の子の様でお兄ちゃん…もといお姉ちゃんスキルが発動して右手で頭を左手は背中を撫でて宥める。

「うー…雪乃ちゃんやいろはちゃんはいいよね…八恵香ちゃんに甘えられて…。」

「なら…甘えますか?」

「ふえ?」

何を言われたのか分からないらしい雪ノ下さん…ではないな…陽乃を強く抱き締めて出来るだけ優しく頭を撫でる。

てか、勘違いするなよ諸君。

これは今の俺が女だからできるんであつて男のままなら通報されて不味い飯を食わないといけないしやらないよ?

だから、再度俺…いや、私は女になろう。

「陽乃。頑張ってるんだね。いい子いい子。」

「や、八恵香ちゃん?」

「違うよ?お姉ちゃんでしょ?」

「え、あ…うう。」

陽乃はまだ姉としてのプライドが残っているのか私から逃れようともがくが酔つて上手く力が入らないのか離れられない。

「恥ずかしがらずに言ってみて。」

「う…お…ねえちゃん…。」

「いい子ね。」

「~~~~~!!」

観念したのか蚊の鳴くような声で私を姉と読んで恥ずかしいのか私の胸に顔を埋めて悶える。

「よしよし。いっぱい甘えていいから、ね?」

「いいの?本当にいいの?」

「いいよ。今まで沢山頑張った陽乃へのご褒美だよ。」

陽乃はお菓子をおねだりする子供の様な怒られないかと不安な表情で俺を見つめて何度も確認する。

そして私は気付いた。

「姉妹も母親も恋人も全部の愛情をあげる。陽乃は一杯欲しいだよね

？」

陽乃は完璧なんかじゃない。

それどころか人としては一番大事な愛情を全く貰えてない。

「じゃあ…ギユツてして…。」

「ん…これでいい？」

「もつと…苦しくてもいいから力一杯、して？」

「わかった。」

「んう…あ…。」

陽乃を力の限り強く抱き締める。

陽乃の肺から空気が押し出されてその綺麗な唇から漏れると同時に喘ぎ声にも似た声が響く。

「お姉ちゃん…好きい。」

「私も好きだよ。」

「…キスして。」

「ん…。」

陽乃を抱き締めたまま横になり、体を入れ替えて覆い被さる。

陽乃はされるがままでキスも私が陽乃の口内で舌を絡めとり愛撫する。

「ん、はあ…。」

「ん…んう、もつとお。」

「はいはい。ちよつと待って。」

クチュクチュク。

「ん、あ…これ飲んで。」

私の愛液を飲ませるために膣を少し掻き回して陽乃の目の前に差し出す。

「あ…／＼あむ…ん、チュツ、レロ…んむ。」

嬉しそうに陽乃は指に付いた愛液を舐めて飲み干す。

そして直ぐにそれが生える。

「ん！ああつ！お姉ちゃん!!お姉ちゃん!!」

「陽乃…頑張つて。お姉ちゃんがいるから。」

ズリユリユ!!

「あああ!!」

「陽乃：陽乃：頑張ったね。いい子だね。」

陽乃から日本人の平均をゆうに越える剛直が生える。

男根が生えるためとは言え相当苦しくて陽乃は玉のような汗を滲ませながら肩で息をするが頭を撫でて額や頬に沢山キスすると嬉しそうに微笑んで私を見つめる。

そんなかわいい陽乃にもっと甘えさせたくて私は思い付く。

「陽乃。」

「…なあに?」

「おっぱい飲みたい? まあ、母乳は出ないけどね。」

「ふえ!? ……あう…飲みたい…／＼／」

陽乃は恥ずかしそうに頷く。

私は一度体を離して膝枕をしてあげる。

これからされる事が分かり恥ずかしいのか両手で顔を隠してしまった陽乃の手をゆっくりと退ける。

「うう…恥ずかしいよお…／＼」

「今は陽乃と私しか居ないんだから大丈夫。…ん、しよ。」

恥ずかしそうにする陽乃を余所に私はパジャマのシャツを脱ぐと寝るときにはブラはしていないので胸が陽乃の前でぷるんとさらけ出される。

「はい。陽乃。」

「……………／＼…んむっ、チュツ、チュツ。」

「ん…／＼／おいしい?」

陽乃は頷いておっぱいを吸い続ける。

そんな陽乃の両手を取り、吸っているおっぱいを揉ませる。

赤ちゃんが母乳の出を良くする為にする行動だ。

「まるで大きな赤ちゃんね。」

「~~~~／＼／」

「フッフ♪…でも、ここは違うみたい。」

右手で首が疲れない様に支えてやりながら視線を大きく盛り上がったスカートに目をやる。

そして左手を伸ばして服の上から軽く撫でるとぴくんと陽乃の身体が震える。

「汚したらいけないからヌギヌギしようね。」

陽乃の返事は待たない。

今は陽乃は大きな赤ちゃんだから服を自分で脱ぐことは許さない。

私は片手で陽乃のスカートのファスナーを下ろしてフックを外す。

そして一度撫でるのをやめて右手も使って両足を上げてスカートを取り、そのまま下着も抜き取る。

頭から手が離れた時に寂しそうな顔をする陽乃がかわいくて仕方ない。

「凄くパンパンに張ってるからこっちもナデナデしてあげる。」

だから私は右手で先程の様に頭を撫でてやりながら左手で固く勃起した剛直の頭を手の腹で撫でるとピクピクとそれは喜んでいるかのように跳ねる。

「よしよし。」

熱く腫れた剛直を握り擦り始めると直ぐに鈴口からカウパー液が溢れて私の手を汚し始める。

それを亀頭全体に塗って人差し指と親指でわかを作ってカリを集中して攻めると直ぐに陽乃は内腿を擦り合わせ初めて射精しそうになるがそこで動きを緩める。

「ふうん、んん…。」

陽乃は射精出来ずにもどかしいのか私を見つめてその涙目で訴えて来るが私は動きを速めたりはしない。

ちやんとおねだりさせないと甘えたことにはならないからね。

「ん？どうしたの？お姉ちゃんにちゃんと行ってみて。」

「んっ、チュツ、ぷはあ…お姉ちゃん…陽乃ね、イキたいよ…。」

「びゅーしたいの？」

「うん…びゅーしたいよお…もどかしいの…。」

ヤバイ。陽乃がかわいすぎて死にそう。

私の背中をゾクゾクとして顔がニヤけてしまう。

「そっか。じゃあ、一杯びゅーしようね。」

出来るだけ優しく微笑んでから手の動きを速める。
もちろんカリを集中して攻めるからものの数秒で射精するだろう
がちやんと甘えられた陽乃へのご褒美。

チュクチュクチュクチュク。

「ほら、頑張つて。びゅーしようね。びゅー。」

「んんっ、チュツ、んむう…あう、チュル、ん、んんくく!!」

びゅるる！

びゅー、びゅー！

「ん、すごい一杯出たね。えらいえらい。」

出してる間も陽乃はおっぱいを離さずにそのまま射精する。

私は胸や顔など色んな所に陽乃の精液を浴びるが気にせずはまだ
固いままの剛直をティッシュで綺麗にしてあげる。

「気持ちよかった？」

「ふうん…／＼」

いまだにおっぱいから離れない困った子の頭を優しく撫でる。

「ほら陽乃。お姉ちゃんが全部してあげるから一度離して、ね？」

「チュツ、チュツ…ぷはっ。むう…。」

「そんなにむくれないで。ちゃんとおっぱいあげるからね。」

むくれて頬を膨らます陽乃をなだめて一度体を離す。

服を全て脱いでから陽乃の上に股がりゆつくりと腰を落として剛
直を私の中に招き入れる。

クチュ、くぶっ…ずぶぶ。

「ん…はっ、ああああ、んっ。」

「ふあ…んああ、お姉ちゃんの中…温かいよ…」

「んっ…陽乃のも温かいよ。お姉ちゃんの中気持ちいい？」

「うん。凄く気持ちいいよお…。」

「よかった。ほら、こっちおいで。」

陽乃の背中と頭の下に手を差し込み上半身を起こす。

対面座位と言うやつだ。

そのまま陽乃の口元におっぱいを差し出すと躊躇いもなく吸い付
く。

「陽乃が満足するまで一杯甘えていいからね。」

陽乃はおっぱいから口を離したくないのか頷いて返事をする。

そんなかわいい女の子の邪魔をしないように腰は動かさずに陽乃の体を支えながら頭を撫でると眠たくなったらのかゆつくりと目が閉じていく。

「眠たい？いいよ…お休みなさい。」

私の言葉に陽乃はまだ寝たくないのか寂しそうな顔をするが睡魔には勝てないのかついに完全に目が閉じられてスツと通った綺麗な鼻から寝息が聞こえ始める。

「んっ…寝ても吸うのは止めないか。」

寝たことにより時折加減なしに強く吸われる乳首に快感を感じて身を震わせる。

「あん、ん…それにこつちもまだまだ眠たく無いみたいね。」

グリユと容赦なく子宮口を突き上げる陽乃の剛直は私を滅茶苦茶に犯したいと主張するようにビクビクと何度も震える。

「動いたら起こしちゃうから…んんっ。」

菊門、下腹、腹筋と下から上にせり上げる様に筋肉に力を入れて剛直を搾る。

時に逆方向からも加えて何度も膣内を蠢かすと既に射精寸前だったのか直ぐに精液を吐き出す。

びゆる、ごぶっ、とぶとぶとぶ。

「ふっ、あっつ…んっ、あ…。」

大きな声を上げないように自分の口を押さえる。

剛直から吐き出された白濁は容赦なく私の子宮を犯し、それだけでは厭きたらず子宮が一杯になると膣内を汚していく。

「ふっ、ふっ…まだ、足りないよね。」

また私は力を込めて剛直から精液を搾り出そうとする。

音は耳を澄まさないで聞こえないほど小さな水音が響くがこれなら大丈夫だろう。

「ああああ…もうお腹パンパン。」

あれから陽乃は何度も精液を吐き出すが一向に萎える気配のない剛直は射精量も変わらず多いままで濃さもゼリーみたい濃い為、陽乃の剛直が栓となって私の子宮や膣に溜まる一方でお腹がまるで妊婦の様に膨れてしまった。

びゅっ、ぶびゅるるる、びゅー、びゅー、びゅー。

「あ、また出てる…熱いよ…も…ダメ、いくううう…。」

熱い精液とお腹を圧迫する感覚に私も何度目かの絶頂を迎えた時に陽乃が目を覚ました。

「ん…う…おねえ…ちゃん…?」

「はあ…はあ…んっ、なあに?」

寝惚けてる陽乃は私が苦しそうに見えたのか不安そうな顔で心配してくれる。

だから私は優しく微笑んで見つめ返す。

「どうか、したの?」

「ううん…どうもしない…よ?」

「ん?…!?!」

陽乃が体を離して現状を理解したのかびっくりしている。

「お姉ちゃん!大丈夫!?!」

「うん。大丈夫。」

陽乃がおろおろと狼狽すると言う珍しい表情を目にした私はクスクスと笑ってしまう。

「は、はは早く抜かないと!!」

「ん、大丈夫だよ。」

「あわわわ…。」

どうしたらいいのか分からずに目をぐるぐると回す陽乃に触れるだけのキスをする。

「陽乃。」

「ふえ?」

「満足できた?」

「!?!…うん。ありがとう…お姉ちゃん。」

「どういたしまして。」

私の問いに今までの事を思い出したのか真っ赤になる陽乃。

そんな陽乃の姿に私は心がポカポカと温かくなり、ベッドの脇に置いていたあるものを手に取る。

「ごめんなさい……一杯迷惑かけちゃったね。」

「いいですよ。」

これで終わりと言わんばかりに必死にいつもの仮面を着けた雪ノ下さんに気付いて俺も男に戻る。

「今回の事は忘れ、っ!?!」

「忘れませんよ。雪ノ下さんは頑張り過ぎですからね。俺の……いや、私の前くらいは甘えて……頑張らなくていいよ……わたった?陽乃?」

「……………ん、わかった。ありがとう。お姉ちゃん。」

私の言葉に陽乃はその瞳から大粒の涙が溢れて顎を伝う。

その涙を指で拭いまた抱き寄せる。

「それで……美味しい?」

「うん♪美味しいよ……イチゴ味のキャンディー♪」

ホワイトデーでの飴の意味は

「あなたが好きです。」

そして、イチゴの花言葉は

「尊敬と愛。」

「あなたが私を喜ばせる。」

それと……

「幸福な家庭。」

〈 f i n 〉

私を自分の局部に跨がらせて長いオチンポを本来開くはずのない子宮口を抉じ開ける。

その全てを私のオマンコに挿入して何度も膣内射精を繰り返した結果、私のお腹は膨らんで臨月を迎えた妊婦の様になっている。

そして、そのお腹を撫でるお嬢様は凄く嬉しそうに微笑んで我が子を慈しむ様に両手でお腹を撫でる手が気持ちよくて少しくすぐったい。

ズリユ…リユ、ゴポツゴポツ、トロオ…。

「あ…。」

お嬢様がゆつくりとオチンポを引き抜くと子宮に溜まりに溜まった精液が逆流して溢れ出す。

それは下にいるお嬢様にも掛かり、汚すがお嬢様は汚れるよりも私の中から精液が流れてしまうのが悲しいのか眉を潜める。

きっと私を孕ませたと思ったからかもしれない。

だから私は誘う。

沢山攻めて貰えるように…もつと一杯出して貰えるようにと。

「お嬢様あ…もつと下さい…。」

ズツ、グチュ…グプププ、パチュ。

「……………孕ませて、下さい。」

「っ!？」

ズリユ!バチュン!!

「あっ!?!かはっ!!」

挿入したオチンポを乱暴に引き抜かれてまた奥まで突かれて蹂躪される。

その圧迫感に肺の空気が押し出されながら達する。

ガバツ!

「孕ませるわ!絶対!!」

お嬢様が起き上がり私に覆い被さる。

そのまま私の両足を持ち上げて乱暴にベッドに押し付ける様にす

る。

俗に言う【まんぐり返し】と言うやつだ。

ゴチュ！ゴチュ！バチュ！ゴリツ！

「あぐっ！あっ！おっ、じょう…さまあ!!」

只えさえこの体位は平均位のオチンポでも子宮口を刺激できるが、お嬢様のオチンポは平均などゆうに越えるほどに長いからまるで内臓を掻き回されているみたいで…狂おしいほどの快感が私の脳を犯す。

容赦なく上から叩き付けるかのようなピストンに子宮だけではなく、胃までもが犯されているかと錯覚するほどに奥まで蹂躪する。

「はあ、あ、はっ…っ!!」

ごびゅ、びゆる、びゆる!!

「ああっ?!出てます！お嬢様ああ!!」

私を孕ませるのに必死なお嬢様は予告も無しに精液を吐き出す。

いきなり押し寄せる膨張感に私の目の前は火花が上がったかのようにバチバチと視界が点滅する。

ズチュ！びゆる！バチュ！バチュン！びゆるる！ゴリツ！びゅっ

!

「っう!!八恵香!!八恵香ああ!!!」

プシヤアアアア!

「あああああ！お嬢様！出して！孕ませてえええ!!!」

元々体力がないお嬢様が最後に力の限り何度も腰を打ち付けながら射精をしてみに動きを止める。

そのあまりの快感に私は大量の潮を噴いてしまう。

それによって押さえ付けていた力が解けて足を下ろすがお嬢様は何も言わない。

「……………」

「はあ…はあ…んくっ…………お嬢様?」

おかしく思っただけの上で脱力しているお嬢様を見ると疲れ果てたのか静かな寝息をたてている。

「ん、しよっ…と。」

風邪をひくといけなから近くにあった掛け布団を手繰り寄せてお嬢様と一緒に被る。

本当はちゃんと綺麗にしたいけど上に乗っているから動けないし、それに剛直はまだ萎えてはおらずに私の中で脈を打っているからどうしようもないから仕方ない。

「お嬢様…ありがとうございます…凄く気持ちよかったですよ…んっ／＼」

ギュツと抱き締めて小さく囁くとピクリと中の剛直が跳ねて声が漏れてしまう。

しかし、私もお嬢様に一杯攻めて貰えて疲れてたのか眠気が襲ってきてお嬢様の少し低い体温が心地よくてそのまま寝てしまった。

このあと帰ってきた小町に二人でこっぴどく怒られてしまうが昨日のから小町とお嬢様に何回もしたから仕方ないよね。よね？

—雪乃編end—

バサッ!

「ん……さむい……。」

寝ていたら急に布団が剥ぎ取られて寝惚けたまま布団を手探りで探すが見つからない。

「……………起きろ。」

「ひっ!?」

部屋に響く重くどす黒い言葉に俺と雪ノ下が飛び上がる。

そしてベッドの横に仁王立ちする墮天使を恐る恐る見るとそこにはまるでお面の様な満面の笑みを顔に張り付けた小町がいた。

「とりあえず…風呂に入ってきて。説教はその後にたつつつ……ぷりとするから。」

「…はい。」

小町が持つてきていたタオルを貰って私と雪ノ下は風呂場に向かって歩き出すと後ろから声がかけられる。

「風呂場でしたら……捻り潰すから。わかった?」

「は、ははははは!!!」

小町の脅しに怯えた俺と雪ノ下は風呂場で何もせず身を清めて用意されていた服を着て小町がまつりビングに重い足取りで向かう。

死ぬのかなあ…俺。

「ん、ちゃんと自重したみたいだね。」

先程と変わらない満面の笑みでテーブルとセットになっている椅子に足を組んで座る姿は女帝みたいだな。

「じゃあ…とりあえず二人はここに正座ね。」

小町が自分の隣のフローリングに敷かれた足つぼマットに指を差す。

てか、そんなのなんで持つてるのん?

「こ、小町さん?常識的に考えてそれはまずいわ。」

「常識?学校を早退してまで兄…今は姉ですね。会いに着てしっぽり

何時間も獣みたいに交尾してそのまま寝ちゃう人に常識は語れませんよ?」

「う…それは…その…」

ヤバイ。

マジギレ小町が強すぎる。

雪ノ下がぐうの音しかあげていないとかマジでヤバイ。

「とりあえず…せーいーぎー…」

「…はい。」

と言うわけでしたよ。

SEIZAINASITUBOMATTOですよ。

「~~~~~!!!」

もうね。声が出ない程に痛いんですよ。

それから小町の説教は一時間程かかった。

俺と雪ノ下は終了と同時にその場から移動し、痛みに悶えた。

「では、そろそろ帰るわ。」

「送ろうか?」

「いえ、大丈夫よ。今日は貴女に無理をさせたし、帰りに貴女一人で帰らせるのは危険だわ。」

あの説教の後で三人で話し合って俺の体に関して幾つかの仮説をたてた。

一つ、女性化の原因は不明だが現段階で心体に異常はない。

一つ、俺が興奮すると体から発せられるフェロモンの何かで他者の理性が崩壊する。

一つ、俺の愛液を体内に取り込むと男性器が生える。

以上の三つだ。

「とりあえず、明日母ちゃんの病院行って診てもらおうわ。俺の事言ってるしな。そんじゃあ、今日は疲れたから寝るわ。おやすみ。」

「んーおやすみー。」

リビングでバラエティー番組を見ている小町に声をかけて自室に帰ってそのまま寝た。

よっぽど体が疲れていたのか直ぐに寝ることが出来た。

次の日小町は学校に行つて俺は母ちゃんが勤める病院に行つた。

「失礼しまーす。」

「八幡！あんた学校サボつた…つて、誰？」

「まあ、そうなるわな。」

「まさか、八幡なの？」

「そのままかだよ。」

この目の前の椅子で呆けた顔をしてるのが俺と小町の母親の【比企谷 秋穂（あきは）】である。

見た目は小町を大人にして少し目元を鋭くした感じだ。

「…そうか。八幡。」

「ん？」

「いつもの場所で待つてな。」

「了解。」

母ちゃんから鍵を借りてその場を後にする。

会計は母ちゃんが払うらしい。ありがたいな。

俺が今居るのは母ちゃんを始めとした喫煙者の為の休憩室だ。

「待たせたね。」

「いや、構わねえよ。」

扉を開けて母ちゃんが部屋に入り、煙草に火をつける。

因みに銘柄は缶ピースだ。おっさんかよ。

「うるさいよ。まあ、本題だ。」

「ナチュラルに心読むなよ。」

「これ見な。」

「ん？なにになに？」

俺のツツコミはスルーですか。まあ、分かつてましたとも。

母ちゃんから渡された記事は英語で書かれているがもう一枚に手書きの和訳が記されていて読む。

「はあ!?TS症候群!？」

「そうだ。マスコミはおろか警察さえ知られていないし、医療関係でもごく一部の者だけが知るものだ。アメリカで5名の患者が確認されている。」

「俺以外にも居るのか。」

「かなり少ないけどね。確かにいる。」

そこで母ちゃんが腕を組んで窓から外を眺める。

「俺はどうしたらいい?」

「…そうだね。」

そのまま煙草を深く吸って紫煙を吐き出す。

「とりあえず、そのままいな。」

「やっぱそうなるのか。」

「流石にかわいい子供を研究対象にはしたくないからね。」

母ちゃんは子供のようにニカツと笑い俺の頭を撫でる。

「…恥ずいから。」

「照れるな♪照れるな♪」

ガチャ。

いきなり休憩室の扉が開かれる。

そこに現れたのは黒く艶やかな長い髪が綺麗で華奢な手足に整った顔にはまだ幼さが残るがそれすらも彼女の魅力の一つになっていた。

天使や妖精…もしくは何処かのお姫様を連想される彼女は…。

「ルミルミ?」

「ルミルミ言うなって…誰?」

— 続く。

つい、条件反射であだ名（俺の中でのみだが）で読んでしまい怪訝な顔をされるが母ちゃんを見つけると少し甘えた様な年相応の笑顔を見せる。

かわいいな。おい。

「留美ちゃん。いらっしやい。」

「秋穂さん。また来ました。」

「こんな煙草臭くて体に悪い部屋に来なくても此方から迎えに行くのに。」

「いいんです。早くお話したかったですから。」

うーん。かわいいけど母ちゃんと仲良く話してるルミルミは俺が知るのとはかけ離れてるな。

かわいいけどね？うん。かわいいんだよ？

大事なことだから二回言うよ。

「ところであんた留美ちゃんの事知ってるの？」

「ああ、何度か会って話したことあるからな。」

「私は知らないけど。」

「って、言ってるけど？」

既に記憶から消されたか。

なにそれ悲しいんだけど…って、そっか。この姿で会うのは初めてだったな。

「この姿では初めて会うからな。」

「ああ、それもそうだね。」

「??？」

俺の言葉に納得する母ちゃんに反してルミルミは首を傾げてる。

頭の上にクエスチョンマークが幾つも浮かんでる様に見える。

「あー俺だ。八幡だよ。」

「は？そんなわけないじゃん。」

「いや、本当みたいなんだ。」

「え？…ええっ!？」

まあ、驚くよな。普通。

「ん？んん？」

「どうしたんだよ。母ちゃん。」

「いや……………!!」

急に顎に手を当てて思案し始めた母ちゃんが何か分かったのかニヤリと意地悪く笑ってルミルミに近付いて何かを耳打ちする。

「……………でしょ？」

「ふえ!?な、なななな!?」

するとルミルミは顔を真っ赤にしてあわあわしだす。かわいい。

つか、「ふえ!?」とかかわいいな。

そろそろかわいいって言い過ぎてゲシュタルト崩壊しそうだが…
かわいいのにかわいいと言って何が悪い!! (↑崩壊済み)

「ううう!!」

「いや、俺を睨まれても困るんだが。」

何故か睨まれる俺だが、母ちゃんはそんなことはどこ吹く風なのか
ニコニコしながらルミルミを抱き締める。

「留美ちゃんはかわいいなー♪」

「は、離して下さい!!」

「八幡。あんた留美ちゃんを家まで送りなさい。いいね？」

「え？やだけど。」

「なら、あんたがしてる錬金術とやらを崩壊させようか？」

「なっ!?何で知ってんだよ!？」

「あたしを出し抜こうなんて百年早いんだよ。ほら、留美ちゃんを
ちゃんと送るなら見逃してやるって言ってるの。わかった？」

「チツ…わかったよ。」

まさか錬金術を脅しの材料にされるとは思ってもおらず完璧に言
いくるめられた俺は渋々了承した。

「八幡。何で女になってるの？」

「知らん。朝起きてたらなってた。後、この姿の時は八恵香で頼む。」

「……………それ自分で付けたの？」

「違うから。そんな蔑む様な目で人を見るんじゃないやありません。」

母ちゃんのせいでルミルミを家まで送ってる訳だが、追加注文があった。

『あ。後、手を繋いで帰りなさいよ。破ったら崩壊させるから。』

と言うわけで現在進行形で手を繋いでる訳だが：ルミルミ顔真っ赤じゃん。

嫌なら離せばいいのに律儀な子だ。

「じゃあ、誰が付けたの？」

「雪ノ下だよ。ほら、少しお前に似てる黒くて長い髪の毛。」

「ああ…あの胸がな「それ以上はやめてあげて。」…わかった。」

「……………ふーん。」

何故か不機嫌になった留美（もう留美に変える）が急に俺を引っ張りだす。

「ちよ!?!危ないだろ?」

「知らない!!」

そのまま走りだし、仕方なく俺も続く。

暫くすると留美は立ち止まり何かを見て思い付いたのかまた俺を引っ張って急に道を曲がる。

「おわっ!?!何処に行くんだよ?」

「いいから!」

そのまま引っ張られて進んで行くと家は段々減っていき、留美が小さな公園へと入ってしまう。

その公園は手入れはされているものの周りに家もなく、余り子供が来ている様子はない。

「はあ、はあ…急にどうしたんだよ。」

「ごっち。」

公園で一度立ち止まるも直ぐに動き出してドーム状の遊具の中に入る。

「あでっ!ちよ、留美!?!」

留美に引っ張られて頭を打つが何とか中に入れたが直ぐに壁に押し付けられる。

そして、俺に跨がる留美が両手で肩を掴んで俺を押さえ付けが顔は俯いていて表情はわからない。

「る、留美？」

「八幡…八恵香だっけ？」

「お、おう。」

「…：…気に入らない。」

「へ？」

留美が顔をあげる。

その顔は不機嫌に歪んでおり、俺を睨み付ける。

「っ!!」

両手に力が入っていき俺の肩に爪がくい込んで痛みが走る。

「な、何が気に入らないんだ？」

「似合ってるから…：今の貴女に似合ってるから！私じゃなくて他の女が付けたのが似合ってるから気に入らない!!!」

「お…：おい…。」

留美が叫んで中で響いて俺の鼓膜を震わせる。

余りの剣幕に戸惑う俺を他所に留美は言葉を放つのを続ける。

「貴女も気に入ってるんでしょ？じゃなきゃ言い直さしたりしないもんね。」

「留美、やめ…：「お仕置き。」…え？」

とても小学生とは思えない程に冷たい声が響く。

その一言が【私】の中の何かに火を付ける。

「八恵香…：なにその顔。」

「…：へ？」

留美は肩から両手を離して私の顔を包んで目を合わせられる。

見つめた先にある留美の顔は妖艶に笑っており、瞳には加虐心が灯って私を見下ろす。

その視線が私の身体を火照らせ、冷たい声は私の耳を犯して脳を蹂躪する。

「凄くエッチな顔…：してる。」

「留美…。」

留美が私の顔を見えやすくするためか前髪をかき上げてジッと私を見つめる。

私はダメなのに…相手は小学生で私がやめさせないといけないのに…身体はこれからされるであろう【お仕置き】を今か今かと待ち構えてしまっている。

「お仕置きしてほしいの?」

「…うん。」

「返事が違うでしょ。」

「っ!?!…はい。」

留美がまた笑う。

より妖艶に笑う。

そしてこれからもっと笑い私に【お仕置き】をするのだろう。

その姿は綺麗で…でも、愛らしさも残すその姿に私は呼んでしま
う。

「お仕置き…してください。」

「姫。」

— 続く。

「八幡…あ、今は八恵香か。八恵香もノリノリだね。」
「っ／＼」

私の言葉に姫様はからかうように笑って耳元で囁く。
その姫様の言葉に羞恥心を煽られて顔が熱くなる。

「そんなにお仕置きされたいの？変態。」

「や…ちが「違わないよね？」っ!？」

私の否定は姫様の冷酷な言葉と眼差しで止めらる。

その冷たくて慈悲も何も無い言動とは裏腹に私の身体は熱を増して思考が上手くまとまらなくなる。

「違わない、よね？」

「……………はい。」

「変態。」

「くう…／＼」

姫様の罵り一つ一つに身体は反応して子宮が疼いて股から愛液が垂れる。

まだ、残っているか細い理性を必死で働かせて身を振って逃れようとする。

「何で逃げるの？」

「痛っ!？」

しかし、体が小さくなって性的に興奮して上手く力が入らなくて意図も簡単に姫様に押さえ込まれる。

その際にまた肩を強く捕まれて更に爪も立ててたのか鋭い痛みが走り私は顔を歪ませる。

「何？痛いのか？」

「はい。」

不思議そうな顔で姫様が問い掛けてくれて私は頷く。

「……………でも仕方ないよね。」

「え？」

少し考えてから姫様は【仕方ない】その一言で切り捨てて更に追い

討ちをかける。

「だって、逃げようとした八恵香が悪いしね。」

「あ…。」

「とりあえず逃げようとした罰をするから四つん這いになって。」

「え、でも…。」

「早く。」

「……はい。」

無慈悲な姫様の言葉に私は渋々言う通りにするが身体は喜びに打ち震えて子宮が何度もキュンキュンと疼き続ける。

「…これで、いいですか?」

姫様が私の上から退いてもらってから姫様にお尻を向ける様にして地面に手と膝をついて四つん這いになる。

姫様は満足そうに私を眺めている。

「お仕置きと言ったらやっぱりお尻ペンペンだね。」

「恥ずかしい、です。」

「八恵香うるさい。」

「う、すみません…。」

少し怒った口調のお嬢様に叱られてしゅんとしてしまう。

「じゃあ、ズボンとパンツ下ろして。」

「それは…。」

「早くして。」

「はい…わかりました。」

オマンコから愛液が溢れているのがバレたくなって渋るが姫様の強い口調には逆らえずに恥ずかしいのを堪えながら言われた通りにしてお尻を外気に晒す。

「小さくてかわいいお尻だ、ね!」

パァン!

「ひぐっ!?!」

姫様は心構えをさせる間も与えずに一片の躊躇いもなく思いつきり私のお尻を叩く。

その指すような鋭い痛み悲鳴をあげそうになるが声をあげて誰

かに見つかってしまおうと思えば死に堪える。

「ふ、ふふっ…『ひぐっ』だって…。」

姫様は私のうめき声が面白かったみたいでクスクスと笑う。

その姿は幼い子が玩具で遊んでるみたいで今している行為どのギヤツプに頭の中が混乱してしまう。

「じゃあ、次は三発いくから。」

パアン！パアン！パアン！

「ひっ…くう…ひあ！」

返事を待たない姫様は容赦無く叩く。

その度に声をあげてしまう私を見るのが楽しいのか三発終わってもそのまま叩き続ける。

パアン！パアン！パアン！

「あぐっ！ふう！あう！」

パシイン！

「ん、はあ…ん？」

ポタツ。

私のオマンコから愛液が垂れて下ろした下着に落ちる。

そして、姫様がそれに気付いてしまう。

「あ、やっ…これは…。」

クチュ。

「んあ!？」

「ねえ、何でこんなになってるの？」

姫様の小さくて細い指が私の愛液を掬うようにオマンコを触り、私は喘いでしまう。

「思いつきりお尻叩かれてただけなのに…なんで？」

クチュ。クチュ。

「これわあ…ちが、んっ…んあ。」

「喘いでるだけじゃわからないから。」

キュツ、クリツ。

「ひあ、んあああ!!」

答えない私に痺れを切らしたら姫様は剥き出しになっていたクリ

トリスを痛いくらいに強く摘まんでそのまま握ねる。

いきなりの強い快感と言う名の電流が背筋を走り、脳に到達した途端に弾けて私の思考と理性をグチャグチャに溶かしてしまう。

「返事して。」

ピシッ!

「っ!? ああ…あ…。」

姫様がデコピンの要領で剥き出しのクリトリスを中指で強めに弾く。

ほんの僅かに残っていた最後の理性は姫様の指一本でいとも簡単に完全に溶かされてしまった。

チヨロ。チヨロロロ。

「なに? 嬉しくてオシッコ漏らしたの?」

蔑む様に言う姫様に私は快感に酔いしれて返事も出来ずにその場に放尿を続けてしまう。

「まるで犬みたい。これからは犬って呼ぶから。」

「あ、う…。」

呻く私にイラついたのか姫様の顔が不満そうに変わる。

「返事は?」

パァン!

「はひい!!」

またお尻を叩かれて残っていた尿が吹き出すがちゃんと返事をしたので満足そうに姫様は微笑む。

「ん。じゃあ、服脱いで。」

「…え?」

「犬に服は着せない主義だから。」

「いや、でも…「脱いで。」…はい。」

姫様の言葉に逆らえない。

遊具の中で命令通りに服を脱ぎ始める。

震える手のせいでなかなか上手く脱げないが私を見つめる姫様の目はとても小○生の子供がする様な目ではない。

妖艶な灯りを宿す目は私から何を奪い何を与えてくれるのか考えるだけで怖くて、恥ずかしくて…嬉しくて期待に身体が燃える様になって私の恥ずかしい愛液が溢れて止まらない。

ああ、もっと私をイジメてください。

―続く。

「脱ぎ…ました。」

もたつきながらも姫様に言われた通りに服を脱いだ私は恥ずかしくて両手で胸とオマンコを隠してしまうが当たり前の様に姫様はそれを許してはくれない。

「なに隠してるの？退けて。」

「うう…はい。」

命令された私はそれに逆らえる術は無く、両手で隠していた所を姫様に晒す。

姫様の視線が私の恥ずかしい所を舐めるように這ってその視線だけで身体は熱く火照り愛液が溢れて腿を伝う。

「うわ…八恵香ってばエロい。」

「いや…言わないで、下さい…。」

姫様が私の胸を持ち上げる。

「乳首もビンビンになってる。」

「ん、あ…。」

持ち上げられた時の淡い快感に声が漏れる。

そして姫様はニヤリと意地悪く笑う。

その顔は悪戯を思い付いた子供の笑顔だった。

「じゃあ…散歩しようか。」

「……………え？」

「犬なんだから散歩するのが当たり前でしょ？」

「で、でも…。」

外は薄暗くはなってきたがまだ遠くまでは見渡せる程には明るく誰かが通れば一発で見つかるだろう。

でも、姫様は止まらない。

「口答えは許さないから。」

「でも…誰かに見られたら…。」

私の言い分など聞いていない姫様は胸を触れていた手で力一杯に鷲掴んで引つ張る。

「い…いたつ、いです。」

「犬が言うことを聞かなかつたらお仕置きをするのは当たり前ですよ。」

冷たく吐き捨てた姫様はそのまま私を引っ張り遊具から出る。

ダメだと思えば思うほど身体は反応して腿を伝う愛液の量が増える。

そして、姫様は胸から手を離すと私がしていたベルトを私の首に巻いて首輪とリードにする。

「じゃあ、散歩しよつか。」

「……はい。」

しなければ終わらない。

だから歩き出すといきなりリードを引っ張られて首が絞まり、たまたま地面に尻餅をついてしまう。

「あぐっ!? ケホッ! ケホッ!」

「こら。八恵香は犬なの。犬は立って散歩はしないでしょ。」

「…わかりました。」

「ワンでしょ。」

「…………わ、ワン。」

姫様は私の顎を強く掴み自分と目を合わせると自分が主人だと分からせるためか冷たく見下すように命令する。

その言動一つ一つに私の子宮はキュンと反応する。

「よし。いい子いい子。」

「ワウン…。」

ちゃんと出来た私に今度は優しく頭や顔などを撫でて褒めてくれる姫様に私は完全に逆らう意思を無くした。

この人のペットで居られる事を誇ろうと思える程に服従をしたのだ。

「じゃあ、取り敢えず一周しよう。」

「ワンワン。」

姫様の横にぴったりと寄り添い公園の中を歩く。

恥ずかしかったが不思議と嫌ではない。

「姫様とこうして居られて幸せな位だ。

そうして公園を一周した私達は一部芝生になつてゐる所で止まる。「少し休憩しよつか。足拭くから待つて。ハンカチ濡らしてくるから。」

「ワン！」

姫様が近くの水道に向かう。

私はちゃんとお座りをして姫様の帰りを待つ。

「お待たせ。さ、足見せて。」

「ワウ！」

芝生に背中を付けてお腹を見せる犬の様な格好をする私に姫様は微笑んで膝や手をハンカチで拭いてくれていたがあることに気が付く。

「あ、血が出てる。」

「クウン。」

大丈夫だと伝える為に私は首を横に振る。

しかし、姫様はそれでよしとはしなかつた。

「ん、ペロ…消毒しないと。」

「ワウン…クウン。」

血が出ている膝をその小さくて可愛らしい舌で舐める姫様。

私は柔らかいそれが膝を這う感覚にくすぐったくも気持ちよくなり、声が漏れてしまう。

「チュツ、レロ、んっ…ここも綺麗にしないと。」

クチュ。

「ワウン！ふう、ん…。」

ハンカチ越しにオマンコを触られて大きく声が出てしまい口を押さえる。

「ほら、こんなに汚れて。ハンカチだけじゃ無理みたい。」

ムチュ、チュツ、ヂュル、クチュ。

「ふっ…んんっ！んうー！」

口を押さえて声を出さない様にするのだけで精一杯な私は姫様が私のオマンコを舐めて啜るのを止めれない。

そんな事したらダメなのに。

姫様にあれが生えてしまうのに罪悪感半分、期待半分な私は姫様を見つめる。

そして、その時がきた。

「んっ、なにこれ…熱い。」

姫様が体の変化に気付いたのか私のオマンコから口を離して下腹部を押さえる。

始まったのだ。

しかし、私は知らなかった。

姫様に生えたそれは異質だと言うことを知らなかったのだ。

この後に起こることを私は忘れられないだろう。

―続く。

「ああーんんっ!!」
ぷるん。

そんなかわいい音と一緒に小さくてかわいいオチンポが姫様から生える。

「はあ…はあ…。なに…これ？」

「ごめんなさい…。私の…その…あ、愛液を飲むと生えるんです…。」
姫様は自分に生えたそれを見つめている。

「私が…しますから。」

チュツ。

「んあっ!？」

チュル、チュポ。

私は小さなオチンポにキスをしてから口淫を始める。

根元まで加えても喉まで届かないオチンポに舌を何度も絡める。

「あつ、ダメえ！出る…なにか出るよお!!」

腰を引いて逃げる姫様。

でも、私はご奉仕しないと…こんなにした責任を取らないといけな
い。

だから姫様の腰に腕を回して逃れられない様に押さえる。

「んっ、チュポ、ジュポ！らひて…んくっ、チュル…くら、ジュプ、はい
…。」

高速で頭を動かし、頬がすぼまる程に吸い上げて口内で舌を縦横無
尽に動かす。

姫様はその刺激に堪えられずに私の頭を掴んで腰を打ち付ける。

「ダメーダメダメダメ！出るううう!!」

びゅっ。

びゅるるるー!

「んぶっ!?!んっ…んっ…。」

ゴクツ、ゴクツ。

そのサイズからあり得ないほどの精液が吐き出される。

私の口内は直ぐにいっぱいになり頬が膨らんでしまいが次々に流し込まれる精液を飲み込んでいき溢さないようにする。

「あつ、あ……ううう……」

びゆる、ごぶつ、びゆる。

ゴクツ、ゴ……クツ……

射精が止まらない。

姫様は私の頭を押さえてるから口を離せない。

息も出来なくて意識が朦朧をし始める。

「うっ……あ……はあ……」

ごびゆ……びゆっ……びゆる。

視界が暗くなりかけた頃にやっと射精が終わった。

そして、姫様が私の口からオチンポを引き抜く。

「んぐっ……ゲホッ！ケホッ！」

引き抜かれた瞬間に噎せる。

胃は精液で満たされており、溝尾の辺りは少し膨らんでいる。

「な、んなの……でも、もつと出したい。」

「やつ!？」

姫様は私を押し倒す。

しかし、私の太股に擦り付け始めた。

「はっはっ……八重香……スベスベで気持ちいい。」

腰をかくかくと動かして何度も擦り付ける姫様。

いくら性教育を習っていても少女である姫様がセックスが分かる

わけもなかっただから私が導く。

「ご……です……」

クチュ、ジュプ。

「あつ……なにこれ……なにこれえ!!」

ジュプ、チャプ、クチュ、ヌチュ、パチュ。

私のオマンコまで誘導するとスルツとオチンポが入り、そのまま何度も腰を打ち付けられる。

「あつ、あつ……ん、気持ちいい、ですか？」

「うん、うん！気持ちいい！気持ちいいよお!!」

パチュ、パチュ、パチュ。

私の愛液と姫様のがまん汁が混ざり、溢れて水音を奏でる。

「あ…ふう、んっ！」

ギユツ！

「ああっ!?すごっつ…キツイよお!!」

息を軽くはいて下腹部に力を入れて姫様のオチンポをキツく締め上げる。

パチュ、ジユプ、パコパコ。

「出る！また、出るう！」

びゆる、グチュ、ぶびゆ、パコ、パチュ、びゆるるる、パジユ。

何となく予想は出来たが射精を始めても姫様は腰の動きを止めなかった。

「あっあっ！また、また出る！」

ぶびゆるる、パコパコ、びゆるるる、パジユ、パジユ。

「姫様あーあう！いっぱいですう！」

射精は収まるどころか量が増えていく。

既に膣はもちろん…子宮さえも膨らみ始めており、それでもなお姫様は動くのを止めない。

「姫様！落ち着いて！一旦、一旦抜きましよう！」

「やだ！抜きたくないのお！」

びゆるるる、びゆるるる、パジユ、ごぶっ、びゅー。

姫様は私の腰に腕を回してしがみついているため体は離せずに私はその大量の精液を受け止める事以外に出来ることはなかった。

—続く。

びゅるるる！

何度目かも分からぬ射精がまた始まる。

既に膣はもちろん子宮も限界を超えてしまい私のオマンコから白くてどろどろの精液が大量に漏れている。

漏れた精液は私と姫様が繋がっている所を中心に広がり水溜まりが出来てしまっていた。

「あ…つい、くうううう!!」

子宮が膨張しようとして襲い来る圧迫感が快感に変わり私の脳を叩く。

それで私も絶頂を迎える。

姫様のオチンポは小さいけど回数と射精量が異常に多くてオマンコが火傷してしまいそうな程に熱い精液を中に出される度に果ててしまう様になってしまった。

「はっ…はっ！」

ごぶつ、バチュ、びゅるるる、グチュ、ごぼつ。

姫様は荒い息をしながら腰を振る。

辺りはもう既に暗くなっていて一回目の中出しから一時間以上出しっぱなしだ。

私の意識も何度か飛んだ。

「あぐつ…あ…う…ひ、め…さ…ま…。」

こんなセックスは初めて見るし、経験した。

もう、戻れなくなる…。

「はっ…うああ!!」

ごびゅ、ぶりゅるるる。

「あ…あああああああ…」

これ以上はマズイ…。

頭が警告している。

私は逃れようと身を振る。

ぬぷつ。

振った拍子に姫様のオチンポが抜ける。

「やつ…ひぐつ!?」

ぐぶぶ…。

抜けたオチンポは私の後ろの穴…肛門に挿入された。

狙った訳ではないのだろうが腰の動きが止まってないために偶然にもそつちに入ったのだろう。

ぐぶつ、ぬつぽ、ぶりゆるるる。

「ひぐう…や、めええ…。」

肛門でしたことはないが姫様の小さいオチンポは精液が潤滑の役割を果して、抵抗もなく根元まで入る。

でも、初めて感じる肛門の異物感に脳が処理しきれずに目の前がチカチカと点滅を繰り返す。

「あつ、おう、うううう…。」

お腹からごぼつと音になる。

腸内に大量の精液で満たされていき強烈な便意が私を襲う。

ぶびゆ、ごぶつ、ごぼつ。

そんな音が私の体を伝って耳に届く。

「なに、おぐう…これえ…：…こんなのお、おう、知ら…あぐつ、らい…。」

オマンコを攻められた時みたいな喘ぎ声は出ない。

口から漏れるのは獣が唸る様な無様な声だけだった。

ごぼつ、とぶ…ぶしやあああ…。

腸が精液で満たされて膨れるとオマンコに出された精液は押し出されるように溢れて出る。

そして、それと同時に初めての肛門でのセックスに力が抜けて失禁してしまう。

パチュ、ヌコツ、ツポツ。

腸内が精液でいっぱいになったタイミングで腰を激しく動かし過ぎて姫様のオチンポが抜けてしまった。

「ひうつ!?ダメ、ダメだめだめええ!!」

出るのを遮っていたオチンポが抜けて逆流していた精液が一気に流れ出す。

ぎゆるぎゆると腸が蠕動運動を始める。

肛門を締めようとするが姫様のオチンポでほぐされて上手く力が入らない。

そして、止めと言わんばかりに射精に伴い体に力の入ったのか姫様に強くしがみつかれる。

それはお腹を圧迫してしまう。

ぶびゅ、ぶしゅうううう！

「いやっ！やっ！だめえええええええ!!」

肛門から大量の精液が噴射されてしまう。

その時感じたのは排便時に似た快感にだがこんな浣腸みたいな事はしたことがない私はこの快感は凶悪そのものだった。

「あ……あ……」

ぷっ、ぴゅっ、ぷちゅ。

あり得ないほどの羞恥心と未知の快感に私の意識は意図も簡単に刈り取られた。

私が我に返るとまず感じたのは酷い倦怠感だった。

「……あれ……?」

下半身がガクガクと震えてぬるぬると滑っていた。

そして、顔は柔らかくて温かい水枕をもっと柔らかくした様な物に包まれていた。

「ん、しょ……」

震える下半身を抑えて何とか体を起こす。

すると私の目に映ったのは変わり果てた八重香の姿だった。

八重香は仰向けでがに股に開かれた足には大量の精液が付着しており、腕は八重香の頭上に投げ出された。

目は焦点が合っておらずにどこを向いているのかわからず、口は半開きで舌が出て涎が大量に流れ出ていた。

極めつけは女性器はひくひくと膣口を閉じたり開いたりして、肛門はぽっかりと穴が開いて両方の穴からは大量に精液が垂れていた。

「……………ぐり……」

無意識に生唾を飲み込む。

そして…。

クチュ。

私は女性器におちんちんをあてがった。

―続く。

熱い。

多分沢山精液を出して多少落ち着いた私が八重香の女性器に挿入して感じた第一印象だった。

八重香の膣は私を受け入れるとキュツと締まり、私のオチンチンにぴったりとくっついて優しく締め上げる。

その上時折、中の肉が蠢いてオチンチンをしごく。

「あ、ああ……きもち……いい」

腰を動かしていないのに八重香の膣は気持ち良くて下腹部がムズムズとしてオシッコが出そうな感覚が私を襲う。

朦朧とした意識の中で何度も感じた感覚……射精感なのだろう。

「ふっ、ふっ……くう……」

腰を本能の赴くままに打ち付けたい衝動を何とか抑えて八重香の細い腰を掴んで堪える。

まだイキたくない。

それ程に気持ち良くて心地いい。

「う、あ……んんう……」

私が必死に堪えていると八重香が目を覚ましたのか虚ろだった目に光が戻ってくる。

「んう……ひめ、さま？」

「あく、やえ……かあ……」

寝起きの様などこかぼーつとした感じの八重香の目が私を捉える。そして、八重香は優しく微笑んで力が入らないのか少し震える両手を私の首に回す。

「姫様あ……我慢しないで下さい。姫様が満足するまで私はいくらでも受け入れます……から。」

「っ!? 八重香あ!!」

ずる、ばちゅ!

びゅるるう!

八重香のトロトロな膣が先程よりも強く締め付ける。

しかし、それよりも八重香のその言葉に私の理性の糸は簡単に切られてしまう。

ぎりぎりまで引き抜いたオチンチンをまたトロトロの膣の中に打ち込む。

動かなくても出そうだったのだからその一突きだけでオチンチンから精液が吐き出される。

「んん！ あ、つい……です」

「あつ、ああつ!!」

何度も何度も八重香の膣で飛び跳ねながら精液を吐き出すオチンチン。

精液は自分でも分かる位に粘度が高くて濃い。

そんなのが尿道を通って鈴口から出る度に私の背筋を通って脳が焼けるかと思う位に熱い快感が流れてくる。

びゆる、びゅっ…びゆる。

やっと射精が終わると八重香の膣は更に熱くトロトロになっていった。

火傷してしまうかと思うくらいに熱くてどこまでが私でどこからが八重香かわからない。

「姫様……ふあ……まだ、ですよね？ まだ……こんなにも、硬い……」

八重香がねだる様な目で私を見つめる。
ずっ…る。

私はゆっくりと腰を引いてオチンチンを引き抜いていく。

でも、八重香の中は私を離すまいと吸い付くみたいにオチンチンに絡み付く。

無意識だろうけどその感覚がまた私に射精感を高める。

「や…抜けちゃう…」

入ってるのが亀頭だけになるとこれまで以上に膣は吸い付いて締め上げる。

まるで私が出ていくのを嫌がるように。

ぐぶっ、ぱちゅ…。

今度はゆつくりと腰を前に突きだして八重香の膣に入れていく。
こりゆ。

「ふあ!!」

すると先程は無かったコリコリした物に亀頭の先が当たる。
それと同時に八重香がびつくりした様な声をあげる。

「ん、なに?..これ?」

こりゆ、こり。

「ひゃつ、あ、だめえ!」

今まで無かった物があり、不思議に思った私は腰を押し付けたまま
クイクイと動かしてそれを確かめる。

その度に八重香は喘いで首を横に振る。

どうやらこのコリコリとした部分は八重香の弱点みたいだ。

私の中で何かが沸々と沸き上がる。

私の意思とは関係無く口の端がニヤリと持ち上がってしまう。

こりつ、こりゆ、こつ。

「こっ?..ここが気持ちいいんだ。」

「あつ!だめえ!そこ、だめええ!!」

八重香が逃げられない様に細い腰を爪が食い込む程に強く掴んで
腰をグイグイと擦り付けて少しでも奥にオチンチンを入れる。

すると八重香のコリコリのそれは私のオチンチンに吸い付くみたい
に下りてくる。

それがなんだかおねだりしてるみたいで背筋がゾクゾクとする。

「ふ...ふふつ...もつと、もつと哭いて?..ねえ?」

ごっつ、こつ、こりゆ、ごちゆ。

「ああつ!だめだめ!イク!イツちやう!!」

下りてきたそれは私の小さなオチンチンでも容易に届く。

だから打ち付けたり、捏ねる様にしてみたりとそこを弄んで虐め
る。

八重香の声は外だと言うのに叫ぶみたいに喘ぐから私はもつと昂
る。

もつと...。

もつと聞かせて？

もつと見せて？

八重香が乱れて…。

狂う所を。

「あはっ♪ あははは。かわいい。かわいいよ。八重香あ…。」

ごりっ、ごり、ごりゆ。

「あつ、あつ、も、だめええ…イクイクイクイク！あああああ!!!」

ぐぐっ、ごりゆ！

八重香の体が弓の様に反り返る。

体重の軽い私を持ち上げる程に力が入っていて、持ち上がった拍子に今まで以上に強くオチンチンがコリコリのそれを擦りあげた。

「ひぐっ!?!」

「あくっ!?!」

ぷしゅ、ぷしゅあああ。

どびゅ、びゆるる。

その快感はお互いに刺激が強すぎたもので八重香は失禁をし、私は精液をを吐き出した。

八重香のオシッコは私のお腹に掛かり、下へと垂れていく。

不思議と温かくて気持ち良かった。

そんな中で八重香に射精をしている感覚は今まで感じたことが無い程の快感だった。

もう、辺りは真っ暗だ。

お母さんが心配してるかもしれない。

でも…。

でも、まだ終わらない。

いや…終わらせない。

—続く。

夜の公園に水音と肉がぶつかり合う音。

そして女の喘ぎ声が2つがそこに響き渡り、本来憩いの場である公園を別の何かに変えてしまう。

まだ小学生である少女は相手を自らの物にしようと必死に腰を動かして男根を蜜壺に突き立てて白濁を何度も吐き出す。

彼女を孕ます為に何度も何度も。

見た目は幼く見えるが高校生であるもう一人の女の子は激しく求められる事に歓喜し、まだ小さな男根で必死に自らを孕まそうとする姿に愛しさが込み上げる。

女の子は少女の動きに合わせて腰を振り、膣を締めて全てを受け入れる。

「誰かに見付かるかもしれない」そんな事など女…いや、雌になった2匹には気にも止める事などは無かった。

「やえか！やえかああ！孕めえ!!」

「ひめさま！来て！中に出してえ!!!」

もう何度目かの射精と絶頂を私と姫様が迎えた頃には私の意識は朦朧としていた。

だが、脳を焼くかのような快感は弱まるどころかその度に強烈さを増していつていた。

私は絶頂を迎える度に意識が飛んでいるのに気付いていたが直ぐに乱暴に叩き込まれる快感に意識を無理矢理に覚醒させられる。

「ひぐっ！あっ！んあっ!!」

「んっ！んっ！んああ!!」

こちゅ、ぱちゅ。

私に覆い被さっている姫様の鼻先や顎からいくつもの汗が私の顔に落ちてきていて、口元に落ちたそれを私は下を出して舐めとる。

その姿を見た姫様は驚いた様な表情をするが直ぐに泣きそうなのでも、嬉しそうな表情になる。

「んっ…。」

「んむっ…。」

ちゅっ、かちっ、ぷちゅ、ちゅっ。

姫様が私の唇を奪って舌を差し込む。

私はそれを喜んで受け入れて舌を絡める。

でも、お互いに交尾を貪りながらだから何度も何度も歯がぶつかり合うがそれでもキスも交尾も止めない。

私は姫様が動きやすいように両足を回し、両手は首に回して全てを受け入れる。

そして、何度目か分からない射精が始まる。

「んっ…ふうううっ！」

「んんんっ！」

びゆる！ごぼっ！ごぶっ！

私の膣も子宮も精子で溢れて入りきららない精子は流れ出て私と姫様を汚していく。

『もつたいない。』そう思ってしまったているのが分かってかは分からないけど姫様が精一杯の力で私を抱き締め、更に体重を乗せて可能な限り奥へとオチンチン突き入れて栓をしようとしている。

「うっ、うあ…ん…。」

「ふっ、ふっ、んっ。」

私も射精に合わせて絶頂を迎える。

そこで姫様が力なくたつとしてるのに気付く。

体力の限界が来たのか姫様は射精したままの体勢で気を失うように眠りに落ちてしまっていて、私はそのまま余韻に浸って居たかったけどそういう訳にもいかずに姫様を起こさないように後片付けを始めた。

微睡みの中で私はお腹の少し下にムズムズとしたような感覚を感じる。

「ん…う…う…？」

ちゅぴ、ちゅっ、れる。

段々と意識が覚醒していくと今度はアイスキャンデーを舐める
みたいな音が聞こえてくる。

どうしてこんな音が聞こえるのか不思議で私は薄目で音がなる方
を見る。

「んっ…はあ、ん。」

まず見えたのはアホ毛の生えた長髪の頭でそれは上下に何度も動
いて垂れ下がった髪の間から本来は女の私にはあるはずもないモ
ノがあつてそれを舐めている事が分かる。

そして、意識が覚醒していくにつれて徐々に記憶も思い出してい
く。

獣の様に交じり、貪り合つた記憶。

その中での私はどれも醜い程に貪欲で嫉妬し、自分の中にこんな本
性があるなんて想像もしなかった。

いたたまれなくなった私は体を起こして私の醜い本性を体现した
ようなこの棒から八重香を離そうと彼女の頭を掴む。

「んむっ？」

頭を掴むと八重香が私が起きた事に気付いたのか私を見上げる。

そして、八重香は私を見て固まる。

「んっ！」

ぐぶっ、じゆるる！

数秒と短い間固まっていた八重香がいきなり私のを奥までくわえ
込む。

しかも私の腰に腕を回して強く抱き締めながらだから突き放すこ
とも出来なくて、それでも私は八重香を離そうとする。

「八重香！ダメ！離して！！」

「んん…！んんんっ！！」

私の言葉に返事をしてるが何を言ってるのか分からないけど首を
横に振る八重香は離すことを拒否しているのが分かる。

「んふっ!?ぐぶっ…ぐぶっ！」

首を横に振る八重香が急に咳き込む。

当たり前だ。

いくらそこまで大きくはない私の棒だけど私より少し大きいだけの八重香はもちろん頭も小さくてそんなに根元までくわえたらきつと棒の先は喉まで達しているだろうし、その上首を横に振れば喉を掻き回しているのと変わらないのだから。

「ほら、苦しいでしょ?!離して!」

「んふっ!んふっ!……んんっ!」

それでも八重香は離さない。

首の動きを止めて私を見上げる目は強い意志が灯っており、例えこのまま窒息しても離さないと思わせるほどだった。

私は八重香の意思に負けて頭を掴む手の力を抜く。

すると八重香はふっと微笑み行為を再開させる。

「んっ、んくっ。」

「……っ!」

その動きは決して激しくなかった。

八重香はそのままの体勢で奥までくわえてる棒を食べ物飲み込む様に刺激を加えていく。

喉が収縮し、先端を優しく押し擦る。

舌は棒の裏側を舐め上げて、それを何度も繰り返す。

「八重、香……それ、だめ……。」

「んくっ、んむう。」

緩くも決して弱くはない刺激に私は限界を迎えつつあって、八重香もそれが分かったのか再び私を見上げる。

八重香と目が合う。

「はっ、あ、うう……。」

「んっ……ふっ。」

「い、いの……?」

私が問い掛けると八重香は嬉しそうに頷く。

その嬉しそうに笑う表情に私の棒が疼いてびくりと跳ねる。

限界を迎えた私は咄嗟に八重香の頭をしがみつくように抱き締める。

「あうっ!?!ダメ、出る!出るよ!?!八重香!?!」

八重香は返事をしない：いや、出来ない。
当たり前だ。

私が欲望に負けてまた貪ったのだから。

びゅる！びゅるるる！

ごくっ、ごぽっ、ごきゅ、ごくっ。

私から吐き出された欲望の塊は飲み込むと言うより、直接食道に流し込まれると言った表現が正しい。

それでも八重香は私に回した腕を離そうとはせずにそれを受け入れる。

嬉しかった。

こんなにも必死に私を受け入れてくれたのは初めてだったから。

「はっ、はっ、う…。」

びゅ、びゅる。

長い射精が終わりを迎えて私は虚脱感で後ろに倒れ込む。

ずる、じゅるるる…ちゅぽ。

「んっ…んくっ、はあ…。」

八重香は私の棒の中のを全て吸い上げてやっと口を離した。

そして、何も言わずに私を抱き締めた。

―続く。

私は姫様を抱き締めたまま優しく頭を撫でる。

姫様は夜空を見上げたままその綺麗な瞳から涙を流していた。

「姫様…。」

「…何?」

姫様の瞳が私を捉えて見つめていて私は私に出来る最高の笑顔を浮かべる。

「もう一回…しましょう。今度は恋人みたいに優しく、愛し合うように、ね?」

「…うん。」

ゆっくりと姫様の唇に私の唇を重ねる。

触れるだけのキス。

「んっ…。」

次に姫様の唇を啄むように何度もキスを繰り返して徐々にその行為は深さを増していき、何十回目かのキスで互いの舌が触れ合う。

触れ合い、確かめ合う様に舌を絡める。

姫様が私の首に手を回してくれる。

長い時間触れ合っていた唇を離して見つめ合う。

言葉はもう要らなかつた。

「あ…。」

姫様の手が私の胸を持ち上げる様に触れて、淡い快感で口から吐息が漏れる。

ちゅっ、ちゆる。

そのまま乳首に吸い付く姫様を私は少しでも楽になるように彼女の頭を抱いて支える。

さわっ。

「んっ!?!」

私の乳首を吸う姫様のオチンチン優しく撫でるように触る。

ピクリと跳ねて感じる姫様を愛しく思いながら手のひらで包み込む様にして刺激するのを止めない。

ちゅっ、はむっ、んちゅ。

さす、こし、きゅっ。

互いに敏感な所を刺激し合い、気持ちが昂ってきてくる。

愛撫を初めてどれくらいの間がたったのか分からず、もう既に時間と言う概念すらも忘れて互いを愛で続けていたが姫様が乳首から口を離すことで終わりを迎えた。

くちゅ。

何も言わずに私は自らのオマンコにオチンチンをあてがう。

そのまま数秒後の間見つめ合い。

ちゅっ。

ぐっ、つぶっ、ずぶっ。

キスと同時にオチンチンを受け入れた。

八重香の中は熱くてトロトロで時折抱き締めるみたいに私のに優しく絡み付く。

先程までの行為では精液を搾り取ろうと締め上げてたのとは全く違つてて同じ膣でもこれ程までに違うのだと思った。

ぱちゅ…くちゅ…。

ちゅっ、ちゅ、はぶっ。

さつきから私も八重香も言葉は交わしていない。

でも、体は…心は交わしてる。

不思議と私がどうしたいとか八重香はどうしたいとかがお互いに分かつていて今も私のオチンチンが何処に来て欲しいとかが分かつてそこに動かすと八重香は自らも動いて受け入れてくれて、お互いの体と心が昂つて来ている。

ちゅる、ちゅっ…ちゅっ。

ぐちゅ…こちゅ…。

動きは激しく無いのに射精感がどんどんと近付いて来ていて、それが分かっているのかコリツとした八重香の子宮口が下りてきて私のオチンチンの先に当たる。

それと同時に八重香体が少し跳ねるけど動きは止まらず、キスも

ずっとしている。

「んはっ……あ……八重香……」

「はあ……姫様あ……」

行為を始めてから初めて名前を呼び、初めて言葉を交わす。

ただ名前を呼ぶだけ……それだけでお互いに何が言いたいのか分かって再びキスをする。

ちゅぷ、ちゅ、れる。

こりゅ、ぐちゅ、くちゅ。

八重香の子宮口は私の先端にキスをし、吸い上げる。

そして、そこまで来ていた精液はついに尿道を伝って鈴口から吸い付いていた子宮の中に直接飛び出る。

びゅっ、びゅるるる、びゅー、ぐっぶっ……ぽっ。

今まで出した中で一番多くて濃い精液が八重香の子宮に一滴残らずに吐き出される。

「はあ、はあ。」

「ん、ふう……はう、ん。」

やっと唇が離れてお互いに足りなくなっていた酸素を肺に取り込む。

八重香は精液が出されたと同時にイッていて今はその余韻を楽しむかの様にピクピクと小刻みに痙攣を繰り返している。

私に生えていたオチンチンはいつの間にか無くなっていた。

「八重香。ごめんなさい。」

「何で謝るんですか？」

行為の後のままの体勢で私は謝る。

でも、八重香は意味が分からないのかキョトンとしている。

「酷いこといっぱいしたから。」

「ああ……大丈夫ですよ。姫様は素敵でしたよ。」

八重香はクスクスと笑う。

彼女は完全に女性になると捨くれた性格はなりを潜めて素直になるみたいで、そんな彼女は優しいお姉ちゃんみたいでつい見とれてし

まう。

「でも…。」

「ん？」

しかし、次の瞬間には俯いてしまい落ち込んでしまっていた。

「私は高三…ルミルミは中一…。」

「うん。そうだね。」

その後もぶつぶつと呟いていて『ロリコン』とか『オワタ』とか聞こえてくる。

さつきまでのお姉ちゃんみたいな雰囲気はどこへやらで思わず笑ってしまう。

「八重香。帰ろっか。」

「はい。そうですね。」

私は八重香に手を引かれて立ち上がった。

「後片付けしてくれてありがとう。」

「ん？気にすんな。」

ぶつきらぼうにそう言って八重香は歩き続ける。

あれから少しだけ残っていた後片付けを二人でして帰る頃には何時もの八重香に戻っていて、でも今も恥ずかしいのを我慢して私の手を握ってくれてる彼女は根っこは変わらずに優しい。

「……………」

平然な顔をしながらも耳がほんのりと赤く染まっているのは気のせいじゃないと思う。

そんな八重香を私は好きだと自覚してる。

でも、八重香は八幡であった時から色んな女の人と仲が良かったから…きつと私はかなりハンデがあると思う。

けど…負けたくない。

今はまだその時ではないと思うから想いを伝えたりはしない。

今はこの想いを大事に育てながら八重香にアピールをするんだ。

この芽生えた想いを花咲かせるために…私は頑張る。

だから、覚悟してね？

八重香♪
—留美編 e n d—

特別編 聖夜をあなたと共に

【クリスマス】

今日はその前日にあたるイブである。

それらは忌むべき存在である。

何故なら町中に憎むべき男女…そう、リア充が闊歩して回り、私を嘲笑うかの様にあつちでイチャイチャこつちでイチャイチャするのだからなあああ!!!

あれか!? 一晩中イチャコラして聖夜が性夜になるんだろう?! いー
ですね!! 彼氏彼女持ちの皆様は!!

「……………はああああああ。」

余りにも虚しくなつて盛大なため息を吐き出す。

もうみんな苦しめ…クルシミマスになればいいんだ……………ふ…ふ
ふふ……………帰ろう。我が家に。

「あれ? 先生じゃないっすか。」

「んー?」

トボトボと車に向かって歩いてしていると後ろから声を掛けられてそ
ちらを向く。

「今、帰りっすか? お疲れ様です。」

「比企谷か…。」

「元氣ないっすね。」

比企谷 八重香…元々男性であった彼女は世界的に見てもかなり
珍しい病にかかり、性転換をしてしまった私の教え子だ。

「どうかしたんですか?」

「比企谷あ…ちよつと付き合いたまえ。」

「え? ちよつ!?」

ガシツ!

彼女を捕まえた私は一刻早くこの場を去りたくて駐車場に停めて
あった車に彼女を放り込み自分も乗ると発進させる。

「つつ…先生、いつも強引過ぎますよ…。」

「仕方ないだろう。あの場所は私には猛毒なんだ。」

「…はあ。それで？これはどこに向かつてるんですか？」

「ん？家だが？」

「誰の？」

「もちろん私のだ。」

「……………は？」

比企谷がなぜか固まる。

「下ろしてください。」

「だめだ。」

げんなりとした表情で比企谷が言い放つが私はバツサリと切り捨てて運転を続ける。

「俺みたいなの連れるより、他に誰かいるでしょうに。」

「……………う…ぐずつ。」

「…え？」

俺の言葉を聞いていきなり先生が鼻を鳴らす。

「いやいや！なんで!？」

「予定…ぐずびつ…あつたけど…断られた…。」

「えつと…り、理由をお聞きしても？」

嫌な予感しかしないがこの流れで聞かないのはおかしすぎるし、意を決して聞いてみる。

「ぐずつ…あいつら…彼氏が出来たから…ずつ、む、無理になったつて…うえ…。」

「あ…うん…それは残念でしたね…。」

地雷踏んじやったねー。

しかも、かなりヤバイやつを思いつきり。

「う、うえ…うわああああん!!」

ついに本格的に泣き出してしまった先生を宥めながら何とか先生の自宅に着いた。

因みに泣いてても運転は安全で八重香的にポイント高かったです
まる

「ほら、着きましたよ。」

「うわーん！」

泣きながら自宅の鍵で扉を開けて中に入る先生に続いて俺も中に入る。

家の中はやはりと言うか中々に散らかっていて専業主婦を希望する俺には毒だ。

「あーあーこんなにも散らかして。ほら、風呂にでも入ってきて下さい。」

「うう…。」

先生はトボトボと風呂場に向かうがその道中は服を脱ぎ散らかしていきながらだった。

「…:…:はあ。」

ため息を一つついて俺は袖を捲って掃除を始める。

はつきり言つてこの家を掃除するのは初めてでは無くて、勝手知つたるなんとやらだ。

ガチャ。

ずっと泣いていたのか一時間程たった頃に風呂場から先生が出てくる。

「落ち着きましたか？」

「ああ、すまなかつた。」

「そうですか。では、ご飯にしましょう。」

「…:…:ああ。」

冷蔵庫の中にあるものでは野菜炒めと味噌汁しか出来なくてそれを小さなテーブルに並べていく。

「美味そうだな。」

「冷蔵庫の余り物で作ったから程々ですよ。」

「いただきます。」

お互いに向かい合うように座って食事を始める。

「ん、やはり美味しいな。」

「そりゃ、良かったです。」

二人で料理を食べ終わり皿を片付け始めると隣に先生が立つ。

「皿を拭こう。今更だが何もかもさせるのは心苦しいからな。」

「別に気にしなくていいですけどね。まあ、お願いします。」

カチャカチャ。

「比企谷。」

「なんですか?」

キュツ、キュツ。

「なんだ…その、何時もすまないな。」

「それこそ今更、ですよ。」

俺の言葉に先生は苦笑いを浮かべる。

「すまないと思うなら少しはしっかりして下さい。」

「ははっ…本当にそうだな。」

「ふう…ここはもう大丈夫ですからテレビでも見て下さい。」

「いや、しかし…。」

「いいですから。ほら。」

「あ、ああ…。」

先生を台所から追い出して思考に更ける。

俺はかかれれば性転換をしてしまう病を発症し、体は完全に女になっ
てしまった。

更には元々家事も嫌いではないのも相まってこのちよつと残念な
女性である平塚先生の世話をせつせと焼いてしまっているわけなん
だが。

そして、色々考えた結果…俺と先生の相性は悪くない。

先生はガサツな所もあるけど基本的に優しくも厳しくてちよつと
残念な所も馴れればかわいいとか思うし…何より俺を理解してくれ
ている。

そんな自分の気持ちに気付いた時にはこの病のおかげで女同士に
なってしまうとか…どれだけ俺は運が悪いのか。

「はあ…。」

ため息をまた一つ。

「ん?どうかしたか?」

俺のため息が聞こえたのか先生が心配してる表情でこちらを見て

いて俺は洗い物も終わって手をエプロンで拭きながら先生の居る方に歩き出す。

「何でもありませんよ。」

「ほんとうか?」

ああ、もう…人の気も知らずにこの人は!

「本当に何でもないですから。」

「そ、そうか。」

そのまま先生から少し離れてテーブルに凭れる様にしてテレビに目を向けるが内容は頭には入ってこない。

そもそもこの人は俺をどう見てるのだろうか。

まあ、流石に嫌ってはいないだろうとは思うが、家にも上げるしな。気になる人?

…うん。ないな。

じゃあ、一人の教え子?

あー…なんかこれな気がするな。

はあ…嬉しいような悲しいような…複雑だな。

「比企谷。帰らなくていいのか?」

「泊まります。」

「そうか…:は?」

俺が何でもないような風に答えると先生はキョトンとした顔で俺を見る。

「泊まるんですよ。」

「いやいや!ダメに決まってるだろう!」

「今何時だと思ってるんですか?もう、日変わってるんですよ?」

「な、ならば私が車で「飲酒運転でつかまりたいんですか?」うぐっ…。」

ぐうの音も出ないのか先生は必死に頭を働かせてるが無駄ですよ。

チェックメイトですから。

「さて、風呂借りますよ。」

「うう…。」

まだ、無駄足掻きをしてるのか唸っているので勝手に借りる事にし

た。

なぜだ？

なぜこんなことになった？

あれか？

これは俗に言う据え膳なのか？

いやいやいや！

比企谷は教え子だし、今は女の体な訳で…。

「……………で、でも…心は男…だよな。」

つて、バカか私は!!

ガチャ。

風呂？

比企谷が入ってたのか？

と言うか、着替えを持ってきてたのか？

「比企谷。着替えは……………へ？」

そこにいたのは私のYシャツのみと思われる姿で頭を拭いている比企谷だった。

正直やり過ぎたかなとは思うし、かなり恥ずかしい。

でも、もう覚悟を決めたからやるしかない。

「どうかしましたか？」

「どうかって…その格好は？」

まあ、ツッコみますよねー。

「ああ、すみません。勝手に借りました。」

「いやいや…そう言うことを言ってるのではなくてだな。」

おお。

先生が顔真っ赤にして目を背けてる。

なんか…ちよつと楽しいかもしれない。

「中身は別にして体だけなら女同士なんですから気にしなくて大丈夫ですよ。」

「いや、しかしだな…。」

「よししょ…と。」

ポスツと先生が腰掛けているベットの隣に俺も座る。

いかん…歯止めが効かなくなってきた。

「つて、何故隣に座るんだ？」

「床がフローリングで痛いんで。」

「座布団があるだろうに。」

「冷えるんで腰に良くないって聞きますし。」

俺から距離を取るように体を動かそうとする先生に俺は必殺技を繰り出す。

「だめ…ですか？」

いや…うん…今の自分を想像したら吐き気がしてきた。

「~~~~~!!?!」

しかし、意外にも先生には効果は抜群らしくて赤い顔を更に赤くして慌てていた。

うん、かわいい。

「先生？」

「うう~~~~！分かった！構わないから！」

「ありがとうございます。」

そんなこんなでちよくちよく先生を弄りながら過ごし、気付いたら時計の針が2の文字を指していた。

「ふむ…流石に夜更かしし過ぎたな。そろそろ寝るか。」

「そうですね。」

「よし。では…。」

そう言う先生はベッドにあつた薄めの毛布を片手に立ち上がる。

「なにしてるんですか？」

「ん？何って…床で寝るんだが？」

うん。こう言う言動はかなり男前だと思う。

「何言ってるんですか。今は真冬ですよ？」

「確かに寒いが大丈夫だろう。」

「ダメに決まってるでしょうに。」

俺は手を伸ばして先生の服を掴む。

正直、拒絶されるかもと恐かったけど先生はしなかった。

「いや、しかしだな。」

「別に女同士なんですし大丈夫ですって…それに家主である先生がベッドで寝ないなら俺は一番寒い玄関前で寝ますよ?」

「それは困るな。生徒である比企谷に風邪でも引かせたら親御さんに顔向け出来ないからな。」

「なら、取るべき選択は1つですね。」

「はあ…今日はやけに強引なんだな。」

観念したのか先生は渋々とベッドに入る。

それに続いて俺も入る。

「それじゃあ、おやすみ。」

「おやすみなさい。」

「……………ZZZ」

先生はベッドに入って直ぐに寝てしまった。

お酒も飲んでいたせいもあるのかもしれないけど元々寝付きは良いみたいで少し拍子抜けしてしまう。

「寝るの早いな。」

俺の事は男としては見てないからだろうか?

まあ…今は女だけだ。

そんな事を考えて少し悲しくなるが気にしても仕方がない。

しかし、色々と考えてる内にムカムカと先生に腹が立ってくる。

俺が勝手にした事で自己中なのは理解してるが、それでも何かしてやらないと俺の気がすまない。

「……………」

やはり壁際は寒いのか俺に背を向けていた先生は寝返りを打ってこちらを向く。

そして、先生に背を向けて拗ねていた俺を抱き締めて暖を取り始めた。

「~~~~!!」

俺は先生のいきなりの行動に声を上げそうになるが何とか抑えてされるがままになる。

首筋にちよつと酒臭い寝息と抱き枕を抱えるみたいに腹に回された腕。

極めつけは俺の背中であんなムニムニと形を変える胸が理性を凄く速度で削っていく。

女性にしては身長の高い先生。

女性になつてかなり小柄になつた俺。

俺は先生にすっぽりと収まる様になつてしまつて先生も抱き心地が良いのか離れようとはしない。

「はっ、う…。」

我慢の限界だつた。

「ん、あ、あ…。」

俺は先生に抱き締められたままゆつくりと秘所手を伸ばす。

指先が下着に触れるとそこはしつとりと水気を帯びており、それが汗等では無いことは明白で何もしていないのにこんな風になつてしまつている事実顔が熱くなる。

男が興奮すると勃起する様に女は興奮すれば濡れてくる。

そんな当たり前の事だが自分が先生の家に上がり、世話を焼いて…こうしてくつついてるだけで気持ちが高まっているのだと嫌でも思い知らされる。

でも、手を止める事は出来ずに匂いや温もりや感触をオカズにしてる自分が嫌になる。

「あ、ん…んっ…。」

くちっ…。

微かな水音が俺の耳に届く。

俺の下腹部は熱く火照り、温度を上げていく。

「んん…むにや。」

スツと温もりを求めてか自慰行為をしている右手に先生の手が重ねられる。

俺の頭の中は先生をもつと感じたい…いや、もつと先生で感じたいと劣情でいっぱいになつてしまった。

俺は震える手で先生の手を掴み秘所に導く。

……くちゅ。

「っ!?~~~~っ!?!?」

イツた。

イツてしまった。

ちよつと触れただけで!

下着の上からなのになだ触れただけで俺の体はびくりと跳ねてオーガズムに達したのだ。

「く、ふう……。」

先生を起こしてしまわないようにビクビクと跳ねる体を必死に抑えて、指を噛んで声を殺す。

それでも俺の指は止まってはくれなかった。

もつと欲しい……もつと感じたいとこの気が狂ってしまいそうな程の快楽を貪ろうと先生の指を秘所に押し込む。

「んっ、んんっ!はっ……。」

必死に声を殺す努力も虚しく声が漏れ始める。

ダメだ!

先生が起きるから!

くちゅ、くちゅ。

まるで右手だけが別の手になってしまったかのように俺の言うことを聞かない。

……っぷっ。

下着をずらしてついに先生の指は俺の膣に入る。

それだけで俺の視界は真っ白になりそうになってしまう。

「ん……んうう……。」

ぐりっ。

「ひっ?!?!」

このタイミングで先生が伸びをしようとしたのかグツと手に力が入る。

すると膣に入っていた先生の指は容赦なく俺のGスポットを押し上げてしまった。

その予想外の強烈な快感に視界がチカチカと花火が飛び散り、虚脱

感で全身の力が抜けてしまった。

ぐっ、ちゅぽ。

「ひゃっ!? あ…だめえ…。」

指を曲げられたまま臍から引き抜かれてしまい、それと同時に力が抜けてしまった私の秘所は尿意も我慢出来なかったのか今にも放尿してしまいそうになっていた。

「うう…ん?」

しかも何とタイミングが悪い事なんだろう。

先生が起きたのか上半身を起こしてしまった。

「んん? どうかしたのか?」

「なん…でもない、です。」

ああ! もう、だめ…出る!!

ちよろ…。

ついに決壊を迎えてしまったそれはもう止める事も出来なくて次から次へと溢れて下着に始まり、先生のYシャツを越えてベッドまでも汚していく。

「比企谷?」

何も知らない先生は俺の名前を呼ぶ。

「……………」

尿を出し切った俺の冷静になった頭が罪悪感でいっぱいになる。

俺はなんて事をしてしまったのか。

あんなにも俺を心配してくれた唯一と言っていい程の恩師…そして、本気で好きになったこの人で何をした?

寝てるのをいい事に自らの欲望を満たすために道具みたいに貪って…最低だ。

そう思うと目から涙か溢れて私の顔を伝ってベッドに染みを作る。

「比企谷…泣いてるのか?」

漏らしてしまった羞恥心と先生に対する罪悪感で俺は手で顔を隠し、体を丸めるようにするしか出来ずにいた。

ガバツ。

「ひゃっ!?!」

そんな俺を先生はお姫様抱っこで持ち上げる。

先生は俺の尻や腿に付着した尿が服や腕を汚すが気にする素振りを見せない。

「風呂に入るぞ。」

「…はい。」

「どうだ？落ち着いたか？」

「…はい。」

あれから先生に体を洗われて今は湯船の中で俺を自分の上に乗せる形で二人でお湯に浸かっている。

俺は借りてきた猫の様に大人しくする事しか出来ずにされるがまだまだ。

「まあ、なんだ…深くは聞かないさ。」

「……………なんで…。」

なんでなんですか…？

バシヤ！

「んっ！」

「んむっ!？」

俺は体を反転させて先生に抱き締めるようにして唇を奪う。

先生は驚いて目を見開く。

「んっ、ぷはっ！な、なななな!？」

「俺！好きです!!」

唇が離れると同時に少し前から自覚した自分の気持ちをつける。

自分の感情を相手に押し付ける俺がもつとも嫌う行為。

自己中で醜くてヘドが出そうだ。

「……………」

俺の目を見つめる先生の目から驚きが消えて真剣な眼差しに変わる。

「好き…なんです。」

結局、俺は黒歴史を量産していた中学の時から何一つとして成長もしてなくて。

周りの人を困らせて傷付けて…本当に救えない馬鹿だ。

「比企谷…。」

こんな身勝手な俺を受け入れて貰えるはずがない。
だから目を逸らして俯く。

「……………すみません…俺、帰ります…。」

ザバア。

湯船から立ち上がり、立ち去ろうと歩き出す。

しかし、それは急に引っ張られてそれを拒まれる。

「きゃっ?!」

ちゅっ。

引っ張られてバランスを崩した俺を先生は抱き止めて唇を柔らかい唇で塞がれる。

「んっ…ちゅっ、はぁ…。」

「はっ…あ、先生…。」

ゆっくりと唇を離して先生が俺を見つめる。

そして、フツと柔らかく笑う。

「告白して答えも聞かずに去ろうとするな。バカ者。」

先生はそう言ってから俺を強く抱き締める。

「私も好きだよ…。」

「嘘…。」

先生が俺の事が好き?

ありえない。

だって、俺は先生に迷惑しかかけてないのに。

さつきだって先生をオカズにするだけじゃ飽き足らず、手を取って自分の欲望を満たすだけの道具にした上に失禁してベッドまでも汚して。

そんな俺を好きになる訳無い。

「嘘とは酷いな。比企谷から告白して来たのに。」

先生が手のかかる子供を見るような目で苦笑いしてる。

「私だって教師である前に一人の女なんだ。いくら生徒でも好きでもない奴を家に上げたりしないさ。」

今度は照れているのかそれを隠す様に子供みたいに笑う。

「まあ、はつきりと自覚したのはさつき比企谷に告白された時だけだな。」

次は真剣な目で俺を見ていて、コロコロと変わる表情を見せてくれて。

「比企谷の真剣で真っ直ぐな目を見て『ああ、私も好きなんだ』」

この表情豊かで真摯で…。

「つて、そう思ったら予想以上に素直に私の心に収まってな。」

優しく…厳しくて…。

「まあ…なんだ。こんなガサツで家事も苦手なダメな女だけだな。」

真っ直ぐな先生が…。

「比企谷…いや、違うな。八重香を一生愛せると誓える。」

大好きで、愛している。

「普通は逆だが私達はこれが似合ってるだろうな。八重香。」

「…はい。」

先生の視線と俺の視線が交じり、一つになる。

そして…。

「毎朝、八重香の味噌汁を作ってくれ。」

心も一つになる。

「はい！」

先生は俺を苦しい位に強く抱き締めてキスをしてくれた。

俺も背中に手を回してしがみつく。

唇を合わせ舌を絡めて互いの唾液が混ざり合いそれを飲む。

人と深く関わるのを怖がっていた俺だがそれは酷く心地良くて…

嬉しくて…くすぐりたい。

「八重香。」

「先生。」

「今は先生じゃない…だろ？」

「はい…静さん。」

静さんは嬉しそうに笑いまたキスをしてくれる。

「ん、はあ…八重香。抱くぞ。」

「ぶはっ…はい。」

俺の体質を知る静さんは真剣な眼差しでそう言い。

俺はそれを笑顔で答える。

ギシッ。

「んっ…。」

「大丈夫か？冷たかったか？」

俺が風呂ふたに横になる時に声をあげると静さんは心配してくれる。

「いえ…大丈夫ですよ。」

「そうか、良かった。」

笑顔で答えると静さんもホッとした表情をする。

そして、ゆっくりと閉じていた足を開いて自らの恥部を静さんに見せる。

俺の秘所は自分でも分かる程に濡れている。

ゴクリと静さんが唾を飲み込む音が浴室に響いて俺の耳に届く。

ちゅっ…れる。

「あ…んっ。」

静さんは腿にキスをし、舌を這わす。

その感触が快感へと変わり俺の脳に伝わる。

ちゅっ、ちゆる、れる…ちゅ。

「ん、あ、ああ、はっ。」

何度もキスを繰り返しながら下に下りて行く。

そして、秘所の真横にキスをした後…口を付けた。

ちゆる。

「あ…。」

先程までのキスよりも強い快感に声をあげて静さんの頭を掴んでしまう。

「ここは嫌だったか？」

俺は慌てて首を横に振る。

「き、気持ちよくなって…その……もっ…して、下さい。」

俺は素直な気持ちを伝える。

とてつもなく恥ずかしいけど、静さんには俺の気持ちを知って欲しかったから。

「そうか…ん…。」

ちゅっ、ちゅぶ、れろ、れる。

「あ、あ、静…さん！んっ…気持ち、いい…。」

静さんが俺の秘所を舐めて吸つてと様々な刺激を与えながら愛撫を続ける。

恥ずかしくて死んでしまいそうだが、求められてると思うと嬉しくて愛液が溢れ出る量が増す。

じゅ、じゆる。

「ひゃあ、だめ…それだめ…。」

俺の愛液を啜る音が響き渡る。

流石に恥ずかし過ぎて静さんを止めようとするが止めてはくれない。

「恥ずかし…んあ、あ…からあ…だめ…。」

「ん、ぷはっ。仕方がないな。」

やっと俺の懇願を受け入れてくれたのか秘所から唇を離す静さんの顔は愛液で汚れてて、俺は体を起こすが上手く力が入らずに静さんに凭れる様な形になるがちゃんと抱き止めてくれる。

俺はそのまま静さんにキスをする。

「んっ…口直し、ですよ。」

「ん、別に必要ない…が八重香からのキスだ。貰っておくさ。」

そのまま顔を汚している愛液を舐め取っていく。

「…ん、ちゅっ…ペろ、んっ。」

「はは、くすぐったいな。」

しっかりと俺を抱き止めながら頭を撫でてくれて俺は嬉しくて舐め終わると静さんの頬や首やいたる所にキスをして、言葉では足りない愛情を示そうとする。

それが伝わったのか静さんは俺を抱く腕の力が少しだけ強くなった。

「っ…。」

静さんの顔が苦しそうな表情に変わる。
変化が始まったのだ。

静さんはそれを理解した上で俺の愛液を受け入れてくれたがその表情を見ると罪悪感が胸を突き刺す。

「くう、これは…予想以上だな…。」

「ごめんなさ」「謝らなくて…いいさ。」「…静さん。」

「私がこれを分かって…うくつ、受け入れたの、だからな。」

俺は静さんにキスをする。

自分に出来るのが少しでも気を紛らわせれないかと必死に舌を絡める。

ずっ、ずりゆりゆー！

「んんっ!!?」

静さんに生えた剛直は身を寄せていた俺の恥丘に当たり、脈打っている。

俺は熱く滾る剛直を恥丘や下腹を使って擦る。

「ん、はあ！はあ！」

「ん、ふう、大丈夫ですか？」

「はあ…ふうう…ん、大丈夫だ。」

俺を心配させまいと優しく微笑むがその額には玉の様な汗が流れてる。

「こつち、来てください。」

「ん？おお!？」

俺は静さんと場所を変わり、風呂ふたの上に彼女を座らせて足の間で膝をついて静さんを見上げる。

「や、八重香？無理しなくていいんだぞ？」

「いえ、俺がしたいんです。させて下さい。」

「そうか。じゃあ、頼めるか？」

「はい。…ん…。」

剛直をソツと撫でて感触を確める。

熱く脈打つその根元にキスをして舌を出して舐め上げる。

根元から上へ上へと裏スジを擦る様に這わせて今度は反転し、下へ

と下りて袋を舐め始める。

皺を伸ばす様に丁寧に舐めて中にある睾丸をくわえるがキュツと上上がり逃げるそれを吸い付いて逃さない。

口内で転がる睾丸を舌で弄り、もう一つのも同じ様にして愛撫をしていく。

「ん、んっ…ちゆる、ちゅぽ…あ…。」

袋が俺の唾液でベトベトになってしまった頃にやっと口を離すと鈴口からぷつくりと透明な液体が溢れていたのに気付く。

零れてしまわない様に鈴口をくわえて吸い、それを飲む。

しょっぱい様な不思議な味が口内に広がるが少し美味しいと感じてそのまま亀頭に舌を這わせる。

頭を撫でるように舐めてカ리를舌で弾いたり、つついたり自分が思いつく限りの刺激をした後に竿を食む。

唇が火傷してしまいそうな程に熱くて唾液で冷まそうと口内で溜めて舌で塗る。

ぴちや、ぺちや、ちゆる、ちゅぽ。

浴室にアイスを舐める様な音が響き、口元が自分の唾液で汚れていくが気にも止めずに続ける。

キスをし吸い付き、時には唇で磨く様に擦る。

それを何度も繰り返して全体が十分に濡れた頃に一度口を離して剛直を両手で握り手淫をしながら静さんを見上げる。

「あの…気持ちいい、ですか？」

「ああ、凄く気持ちいい。何度か出してしまいそうになるくらいにな。」

静さんが俺の頭を撫でる。

嬉しくて気持ちよくて目が自然と細まる。

「良かった…出したくなったら出して下さいね？」

はぶっ、くぶぶぶ。

もっと感じて欲しくて静さんの返事を聞かぬままに亀頭をくわえて飲み込んでいく。

静さんに生えた剛直は大きくて半分位で喉まで届いてしまう。

「ん！ぐふっ！んっ！」

「お、おい。無理はするな。」

静さんが止めようと顔に手を添えるが俺はその手を掴み指を絡める。

そして、静さんを見つめて首を横に振る。

「止めるなど言いたいのか…しかしだな。」

ぐっ、ぐっ…ぐりゅ！

「んぐっ！んっ！んう！」

「っあ？！」

俺を受け入れてくれた静さんの全てを受け入れたくて半分残っていた剛直を文字通り呑み込む。

カ리가喉を削り食道まで届く亀頭にえずく。

「八重香…ダメだ、早く吐き出せ。」

呼吸も出来ず吐きそうで苦しくて…でも、ちゃんと受け入れられた事が嬉しい。

静さんが俺を離そうとするが目で訴えかける。

ちゃんと呑み込めたよ？

俺も静さんを受け入れられるよ？

…と。

それが伝わったのかは分からないが静さんは離そうとするのを止めて頭や顔を優しく撫でてくれた。

ず、りゅりゅ。

「んっ！…はあ！んっ！！」

ぐりゅ！

酸素が足りなくなった俺は一気に亀頭まで剛直を引き抜き、出来た僅かな瞬間で酸素を取り込みまた奥まで呑み込む。

「あぐ…う、はあ！」

激しく動く訳ではなくて一回一回を深く濃く愛撫をする。

静さんは気持ちよさそうでその表情を見るだけでも俺の秘所からは愛液が溢れる。

「八重香…もう出そう、だから…離してくれ。」

数回それを繰り返したら静さんは我慢の限界に近いのか歯を食い縛って射精を堪えていた。

我慢しなくていいのと思ったが次の言葉でなぜ静さん堪えてい
るのが分かった。

「頼む…始めのは…八重香の中で出したい…だから。」

ずるる、ちゅっ、ちゅぱ。

「わかりました。」

「ん、くっ…ありがとうございます。」

座っている静さんの上に向い合わせで跨がる。

俺は肩の上から、静さんは腰にと絡み合う様に手を回す。

秘所には亀頭が当たり、少しでも腰を落とせば膣に挿入されてしま
う。

そのまま静さんがキスをしようとするので顔を背ける。

「どうした?」

「いえ、その…唾液で汚れてますから…。」

今の俺は口や顎だけではなく首まで唾液でベトベトで躊躇ってし
まった。

最初はキョトンとしていた静さんだがフツと笑い俺の首に舌を這
わせて唾液を舐め取ったのだ。

「ひゃん!?し、静さ、んっ…。」

「八重香ので汚れたのなら…ちゅっ、私が綺麗にしてやるさ。」

「…ん、ああ、そ…んなあ…。」

俺の唾液を丁寧に舐めていく静さんは首、顎…そして唇を舐めた後
に口内に舌を差し込む。

「はあん、ん、ちゅっ。」

「んっ…はむっ、んう。」

つぶ、ぶちゅ。

深くキスをしたままゆっくりと腰を落としていく。

ずっ、ずぶぶ。

「んふっ…ふ…んっ…。」

膣の入口が広げられてカリ首まで挿入される。

それだけなのに凄い快感が背筋に走り、膣が悦びにひくつく。
ずっ、ずっ。

大きくて太い静さんの剛直を浅い所で出し入れをして馴らしてか
ら…。

ずぶぶぶつ！ばちゆ！

「くくく!!」

キスをしたままで声にならないこもった喘ぎ声上がる。

「んっ!!はあ！八重香！ダメだ！我慢が、出来ない！

」

「ぶあ！はい！動いて！突き上げて！出してえ!!」

静さんが余裕の無い切なそうな顔で俺を見つめて叫ぶ。

俺も限界で叫んで懇願する。

ぎゅっ！

腰に回された腕に力が入り、体ごと持ち上げられて秘所から剛直を
引き抜き叩き付ける様に突き上げる。

「ああっ！八重香あ!!」

ばちゆ！ばちゆ！じゅぶ！ばちゆ！

「あっ！あぐっ！静さん！静さんん!!」

一突き一突きが下りてきている子宮を上へ押し上げる位に力強く
て、頭为天辺から突き抜けてしまふんじゃないかと思う程に荒々しい
が俺はこんなにも求められて嬉しくなって自然と口角が上がる。

「出る！出る出る出る！」

ばちゆ！ばちゆ！ばちゆ！ばちゆ！ばちゆ！ばちゆ！ばちゆ！

「出してえ！全部！全部中に出してええ!!」

先程から何度も達して、それが終わる前にまた達してしまう。

その度に力が入り、静さんの背中に爪を立ててしまふが気にする余
裕も無かった。

ばちゆ！ばちゆ！

「ああっ！」

ばちゆん！ぶびゆる！

「ああああああ!!」

びゅるるるる！

「ふあああああ!!」

「ぷっ！ごぼん！」

熱くてドロドロの精液が子宮に直接叩き込まれる。

ゼリーの様に濃い精液は流れ出ることは無くて子宮に留まり、精液を受け入れて子宮がキュンと疼く。

「はあ…はあ…。」

「…あ…う…。」

肩で息をする静さん。

息も絶え絶えな俺。

二人とも直ぐには動けずにそのまま余韻に浸る。

「はあ、はあ…ふう…。」

先に静さんが落ち着いて来たのか俺を抱き直して背中を擦る。

「あんな無茶苦茶をしてすまなかった。」

「大丈夫です。嬉しかったですから。」

静さんは謝るがそんな必要はない。

俺は静さんの肩に頭を乗せて答える。

「いや、しかし…。」

「じゃあ、俺のお願いを聞いて下さい。」

不服そうな静さんに提案をする。

「…わかった。」

少し考えた後にそう静さんは答えた。

「じゃあ、先に出ててくれますか？」

「ああ。」

浴室から静さんを先に上がらせて脱衣所から居なくなるのを確かめてから俺も上がる。

そして、体を拭いてからさつき風呂を借りたときに脱衣所に置いてあった自分の鞆を漁る。

「…あった。」

目的の物が見つかり俺は生唾を飲み込んだ。

「し、静…さん。」

私が先に風呂から上がったから20分がたってから八重香が出てくる。

服装はさつきと同じでYシャツのみみたいでスラツとした細い脚が丸出しで少し目のやり場に困る。

「どうした？」

「あ…電気を消してくれませんか？」

八重香の顔はみるみる内に真っ赤になっていき、小声でお願いをしてくる。

「構わないが、真っ暗でなにも見えなくなるぞ？」

「か、カーテン！カーテンを開けますから！」

パタパタと走ってカーテンを開ける八重香をかわいいと思いつながら電気を消す。

今日は満月で電気を消しても明るくて、白いYシャツに八重香の肢体が影を作っていてその細くて綺麗なシルエットが見える。

それだけで私の心臓が早鐘を打つ。

「きよ、今日が何の日かは…分かりますよね？」

「ああ、クリスマスだな。」

私が答えると八重香はもじもじしては私の見つめて直ぐに目を逸らす。

それを数回繰り返して何か覚悟を決めたのか今度は私の真っ直ぐ見つめる。

「…静さん。」

「なんだ？」

「め…メリークリスマス、です。」

ふさあ。

「なっ!？」

言葉と共に八重香はYシャツを脱ぎ捨てる。

八重香は裸体…では無かった。

細くて強く抱き締めたら折れてしまいそうな手足に真ん中に可愛らしいお臍が見える綺麗なウエスト。

そして、大事な部分は…ラッピングリボンが巻き付いていた。

「ぶ、プレゼントは…こんなんですが…：…：…その…も…らって、くれま
す…：か？」

顔から火が出るんじゃないかと思う程真っ赤になっている八重香
に私は立ち上がり、歩み寄る。

「あの、お願いって言うのは…：お、俺を貰って欲しくて…嫌ならいいで
すから。」

ぎゅっ。

「…：…嫌なわけ無いだろう。」

そのまま八重香を抱き締めて囁く。

「…静さん。」

驚いている八重香が信じられないといった顔で私を見つめる。

「俺…：こんなですよ？」

「こんな、何て事は無い。」

「でも、捻くれてるし。」

「それは否定は出来ないな。」

苦笑いで答えると八重香が少しむくれる。

私は額にキス一つ落とす。

「私は八重香がいいんだ。『ずっと一緒に』なんて言葉では足りない位
に八重香を愛してる。」

「…：はい。俺も、です。」

私を見つめる八重香の目が潤む。

「だから、私の嫁になってくれ。」

「はい！」

その目に溜まった涙がついに決壊して頬を伝う。

しかし、涙を流しながらも八重香の笑顔は世界一綺麗で私は抱き締
めたまま唇を重ねる。

【クリスマス】

それは忌むべき存在だ。

町を歩けばリア充があちらこちらでイチャイチャしてるのだから。

でも…

「静さん…メリークリスマス！」

八重香との深い絆が出来た大切な日。

そういう意味では12月25日は1年の中で一番好きな日になってしまおうのだろう。

「ああ、メリークリスマス。」

また、唇を重ねる。

私達は密着し、キスをし、見つめ合い、笑う。

それを何度も繰り返し、お互いの愛情を確かめ合う。

窓の外は雪が降っていた。

だが、そんなことはどうでもよくて…私はこの腕の中で私を心の底から愛してくれる最愛の人と共に居られる幸せに身を任せました。

「八重香。愛してる。」

「はい…俺も愛しています。静さん」

— f i n .

「送って頂き本当にありがとうございました。」

目の前の女性が俺に頭を下げる。

「い、いえ、お…私はそんな大したことはしてませんから。」

この頭を下げている女性は留美の母親で俺の通う総武高の家庭科の先生でもある。

そして、なんと母ちゃんの後輩らしくて仲も良いらしい。

つまり、何が言いたいのかと言うとそんな女性に俺が落ち着いて会話が出来るはずもなくてもりまくりな訳だ。

「フツ…フツ…。」

そんな俺を見て鶴見先生の後ろルミルミが必死に笑いを堪えてる。
くそう…。

「じ、じゃあ、私はそろそろ。」

「もう夜遅いのに引き留めてしまってますみませんでした。秋穂さんにもよろしくお伝えください。」

「わかりました。」

やつとの思いで話を切るとルミルミが俺の袖を掴む。

「じゃあ、またね？八重香。」

「お、おう…。」

若干瞳が潤んでいて俺を上目使いで見つめる姿は可愛くてつい頭を撫でてしまった。

それを見た鶴見先生は驚いていたが俺は早々に立ち去った。

ガチャ。

ドドドド！

「ただい「お姉ちゃん！」まぶっ!？」

ドゴツ!!

玄関の扉を開けた瞬間にマイスイートエンジェル小町たんからの強烈なタツクルを浴びて吹き飛ぶ。

そのままマウントを取られてガクガクと揺さぶられる。

「いま何時だと思ってるの!？」

「お、おお、ぐふっ…。」

「小町がどれだけ心配したか…って、聞いているの!？」

一気に捲し立てる小町の下で息も絶え絶えな俺だが、小町は説教を続けていく。

「お姉ちゃんはいまは女の子なんだからもっと気を付けないとダメだよ!？」

「う、げほっ!げほっ!」

揺さぶられる視界の端に青みがかつた髪の少女が見える。

あれか?俺は幻覚でも見えているのかと心配になるがよく見るとその少女は俺の知っている子だった。

「…はーちゃん?」

けーちゃんこと川崎京華がおり、俺を見つめて首を傾げている。

って言うか何でここにいるのん?

「ん?ああ、けーちゃん2、3日ウチで預かることになってるから。」

「はっ。」

小町ちゃん?そう言うのは親にかくn「お母さんに許可貰ってるから。」…人の心を読むの止めてくんない?

「はーちゃん…だよね?」

しかし、それよりもけーちゃんは半信半疑みただが俺が比企谷八幡だと気付いている見たいで俺の顔をじっと見つめている。

小さな子供は時として人間離れた感覚を見せる事もあると言うが、これはその一種ではないかと場違いな事を考えてしまう。

「んー…。」

そうこうしている内にいつの間にかけーちゃんは鼻先が触れてしまふ位まで顔を近付けて来ていた。

「はーちゃん…はーちゃん!!」

「ふぐっ!」

小町にマウントを取られてた俺の頭にけーちゃんが抱き付く。

流石に小町程とは言われないがなかなかの勢いで突進してきたけーちゃんを受け止めきれずに首がグリツと嫌な音が鳴る。

「うわー、いたそー。」

「♪」

御愁傷様とでも言いたげな小町ととても上機嫌なけーちゃん。

一体これからどうなるのやら見当も付かない。

因みにけーちゃんは我が家に3日程滞在するとの事だった。

Case Keika Ep. 23

「さて、小町ちゃん？説明してもらおうか。」

「ん？何を？」

俺の言葉に小首を小首を傾げてる。

かわいいな。オイ。

「〜♪」

そしてソファーに座ってる俺の隣で腕に抱き付いているけーちゃんを横目に小町を問い詰めるがご覧の通りとぼけてちゃんと答えてはくれない。

「まあまあ、お姉ちゃん。沙希さんから手紙を預かってるから。事情とか色々書いてるみたいだから読んでよ。」

「サキサキから？」

「うん。何か慌てていたから小町も理由は知らないんだよね。」

「知らないで了承したのかよ。」

「まあ、知らない仲でもないしねー。困ってる時はお互い様ってやつだよ。お姉ちゃん。」

やだ。小町ちゃんメツチャいい子。

これはいつ天使コマチから大天使コマチエルに昇格してもおかしくないな。うん。

「とりあえず、小町は勉強するからよろしくね。」

「お、おう。」

そう言い残した小町を見送り、受け取った手紙を開く。

てか、けーちゃん？なついてくれるのは嬉しいんだけどスリスリ頬擦りしないで。

服越してもプニプニのほっぺの感触が分かるから。メツチャ触りたくなるから。ね？

「えっと、なにになに？」

『この度は急に無理なことをお願いしてごめんなさい。実は両親二人ともが出張先で命に別状はありませんが体調不良で入院をしてしまい、服とか色々と持って行くことになってしまいました。大志と下の

弟の二人はたまたま祖父の家に行っていたのですが私と京華は家に居ましたのでお見舞いも兼ねて向かうことにしました。京華には心配をかけたくはないし、私一人で行くことにしました。しかし、京華を数日一人にするのも祖父の家で一人で向かわせるのも心配な為、数少ない信頼出来る知人である貴方にお預けさせて頂くことにしました。私の家の勝手な都合で本当にごめんなさい。』

手紙は丁寧な文字が綴られており、いつもはぶっきらぼうなサキサキだが手紙の文面はそれを少しも感じさせなかった。

やはりサキサキはちよいと恐い見た目に反して家族思いなんだなつと改めて思う。

今度、『妹がなぜこんなに可愛いのか』と言う議題を真剣に話し合ってみてみたい。

「けーちゃんはなにか聞いてるのか？」

「うん。おとーさんとおかーさんがちよつと大変だけど、大丈夫なんだって。でも、凄く遠い所にいるからはーちゃん家にお世話になってねってさーちゃん言ってたよ。」

「そつか。けーちゃんはそれで大丈夫か？」

「うん。おとーさんとおかーさんに会いたいけど大丈夫って言ってたから我慢するの。」

「…けーちゃんはえらいな。」

「えへへ♪」

正直、驚いた。

けーちゃんくらしいの年の子ならばこんな状況だったらまず泣くし、両親に会おうとただを捏ねるだろう。

しかし、けーちゃんは泣くこともせず状況を理解した上で自分が着いて行けばサキサキに負担が掛かるとウチで世話になることを了承したのだ。

ならば俺に出来るのはけーちゃんが不安にならないようにするだけだ。

「よし。けーちゃん。風呂はいるか。」

「うんー！」

俺とけーちゃんは手を繋いで風呂場に向かい、脱衣所で服を脱ぐ。俺が服を脱ぎ終わってもけーちゃんはまだ脱ぎ終わっておらず声をかける。

「大丈夫か？」

「んー…ぶはっ。うん♪」

すぽんつと上着を脱ぐけーちゃんは見てて微笑ましく。

後、パンツを脱ぐだけとなっていた。

転けてしまわないように注意しながら見守る中無事に全ての衣服を脱ぎ終えたけーちゃん。

「うっし。じゃあ、風呂に突入ー。」

「おおー♪」

キヤツキヤツはしやぐけーちゃんと浴室に入り、ちゃんと頭も体も洗ってから二人で湯船に浸かる。

途中、けーちゃんの目に泡が入ってしまったり等の小さなハプニングがあったもの特に問題もなかった。

「ねえねえ。はーちゃん。」

「んー？どーした？」

「はーちゃん。なんで女の子になってるの？」

けーちゃんは心底不思議そうに聞いてくる。

まあ、そら不思議だわな。

「んー…俺もよく分かんないけど急に女の子になってたんだよな。」

「へー。不思議だねー。」

「だなー。」

流石子供なだけあってこれだけで説明が済むのは凄いな。

まあ、俺も理由なんて分かって無いから助かる。

ぶはっ。

「っ!？」

不意に俺の背筋に弱い電気が走る。

「?どーしたの?」

「な、何でもないよ。」

首をかしげるけーちゃんを誤魔化してバレない様にソツと秘所に

手を伸ばす。

ぬりゆ。

予想は出来たがそこは浴槽のお湯とは別の液体が膣内から溢れていた。

当たり前の話だ。

先程まで留美としていて普通ではあり得ない量の精液を中で受け止めたこの体だ。

いくら、掻き出しても限界がある。

俺の秘所からは残っていた精液が溢れていた。

「~~~~~♪」

けーちゃんを見ると楽しそうに歌を歌っている。

そんな微笑ましい光景を目にしながら俺の頭の中では先程まで激しく交合っていた留美との情事がフラッシュバックする。

それは俺を興奮させるには十分過ぎる出来事であり、隣にけーちゃんが居るにも関わらず手が秘所の上部にある豆…陰核をゆつくりと押し潰した。

「…っ…ふっ…。」

「~~~~~♪」

けーちゃんは楽しそうに歌を歌っていてこちらには気付いていない。

俺の中にある淫猥な感情が徐々に頭を支配していく。

陰核を潰す指を動かすと指から逃げる様に陰核が動く。

その時コリツと擦れてそれだけで先程とは比べ物にならない電流が背筋を通り脳みそを犯す。

俺は絶頂していた。

「~~~~~っ！」

それからは止まらなかつた。

けーちゃんが居るのも忘れて湯船の中で何度も何度も陰核を擦り、何度も絶頂を迎えた。

何度目か分からない絶頂を迎えた時に肩を揺さぶられてるのに気が付いた。

「はーちゃん。大丈夫？」

けーちゃんと目が合う。

その純粹無垢な大きな瞳には俺が映っていて、そこに映る俺はだらしなくて緩みきっていて…雌の顔をしていた。

俺はもう戻れなかった。

「けーちゃん…。」

「お願いがあるんだ…。」

ー続く。

Case Keika Ep. 24

「お願い？なーに？」

けーちゃんがこちらを見つめている。

こんな純粋な幼子に自分の卑しい欲望をぶつける。

考えただけで背徳感が込み上げると同時に秘所からはトロリと愛液が溢れる程に興奮してるのが分かった。

「嫌なら嫌でいいんだけど…。」

出来るだけ優しく語りかけながら立ち上がる。

「ここ…触ってくれないかな…。」

湯船に浸かるけーちゃんによく見える様に足を開いて両手で自らの秘所を晒す。

もちろん意味が分かっているけどけーちゃんは不思議そうにソコを見つめてから首をかしげる。

「おしっこ出るところを触るの？」

「うん。ちゃんと洗ってるから汚くないから、ね？」

「ん…いいーよ♪」

ぐちゅー！

「ひっ!?」

けーちゃんはあるうことか手のひらで秘所全体を押し潰すかの様に乱暴に触るの…いや、叩いたのだ。

「おっ…こうでいいの？」

ぱちっ！べちっ！ぱじゅー！

自分でソツと触っただけでも絶頂していたのに容赦なく乱暴にされ、その度に強烈な快感と痛みが脳を犯してぐちやぐちやになっていく。

「ひぐっ!?はうっ！つつくくくく!!」

あまりの快感に事切れた人形みたいに膝から落ちてやっと快感から解放された。

朦朧とした意識の中でけーちゃんが不安気にこちらを見つめている。

「はーちゃん大丈夫？」

「うん…大丈夫…けーちゃんありがとう。」

けーちゃんの頭を撫でると見る見るうちに笑顔に戻ったけーちゃんが抱き付いてくる。

「いきなり変なお願いしてごめん？おしっこ出る所なんて触らせて嫌だったよな。」

けーちゃんは体を離して眩しい位の笑顔を咲かせる。

「ううん。はーちゃんのおしっこ出る所何かきれいでぶにぶにして気持ち良かったよ♪もつと触ってもいい？」

その言葉に心臓が跳ねる。

「そっか、ありがとう。じゃあ…。」

震える膝で何とか立ち上る。

「今度はもつと柔らかい所…触ってみる？」

そして膣内を見せ付けるように開く。

「うん…触りたい！」

「じゃあ、ここ…この開いてる穴、見える？」

けーちゃんが足の間に入れて秘所を覗き込む。

「うん。」

「ここに指、入れてみて。ゆっくりね？」

「分かった！」

つぷっ。

「ん、ふっ…。」

小さな指がゆっくりと膣に挿入されて体が小さく震える。

「ふわああ。温かくて柔らかーい♪」

「あ…う…ん。」

けーちゃんは膣の内部を楽しむかのように指を曲げたりしているがどこか遠慮をしているみたいでその動きは緩やかだ。

先程、叩き込まれた快感が脳に残っていて正直もどかしい。

もちろん本人は気遣ってくれているのだろうが焦らされているみたいでかろうじて繋がっている理性の糸が徐々に擦り切れていく。

「けー…ちゃん…。」

こちらを見つめるくりくりで大きな瞳には欲望なんて物はなくてあるのは純粹な好奇心。

そんな吸い込まれそうな瞳に自分の醜い欲望が見透かされているみたいで恥ずかしくなる。

「遠慮、しなくて……んっ………いいよっ。」

しかし、今はそれは只の興奮材料に過ぎなくて羞恥心と背徳感がゾクゾクと背筋を這い……『私』が目覚める。

「……いの？」

先程の事で私が痛かったのかと勘違いしてるのか不安そうに聞てくるけーちゃんの頭を撫でる。

「いーんだよっ？けーちゃんがしたいようにして。お姉ちゃんは強いから、ね？」

パツと花が咲いたように笑うけーちゃん。

そんな無邪気な笑顔を見てまた一つ興奮する。

無邪気で純粹なこの子に……手加減なんて全く知らないこの子に、メチャクチャにされると思うと……笑みが止まらない。

「じゃあ、いくよー？」

そう笑顔で言ったと共に私は今まで聞いた事のない音と共に一度目の失神をした。

ぐちゅ！メリッ！メリッ！じゅぼ！！

「……えっ？ひっつう!? あっ!! か、はあ?!?!」

― 続く。